
星屑の詩

柳原奈生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑の詩

【Nコード】

N6540C

【作者名】

柳原奈生

【あらすじ】

3/11、リニユール 人には定められた運命があり、運命によって出会い、出会いは愛情を芽生えさせ、愛情は執着を生み出し、執着は心を黒く染め、苦しみの螺旋へ誘っていく。時に人の心は虚飾によって彩られ、本音を奥底に封じ込める。星屑になぞらえられた人間たちの紡ぐ、哀歓の詩^{うた}。

序章（前書き）

第四話より、登場人物の『相楽綏子』が『相楽妥子』と変わります。
『綏子』が人名漢字の対象外であるとのこと指摘をいただいたためです。

読み方は同じ『やすこ』です。

ご了承ください。

序章

序章

恋は人の心を惑わせ、愛は時に理性を失わせる。

それは、世紀末と呼ばれている頃のことだった。表向きは華やかで、何の不安もなく行き交う人々は毎日を過ごしているようだったが、胸のうちには淡々としてはいられないような思いを抱えていた。いかに煌びやかで美しい服に身を包んでも心は晴れず、不安定な先行きを嘆いても叫ぶことは出来ない、狭く苦しい時代が訪れている頃のことだった。

多くの人はさらさら信じていなかったけれど、世界が滅亡するという噂が流布し、滅亡まで行かなくとも何かしら嫌な予感をさせるような、何をするにつけてもあまり希望を見出せない時期が続いていた。長引く景気は泡のように弾け、夢か幻を見ていたかのような輝かしい栄光は、確固たる基盤がなかったために儚く消えていった。そのためなのだろうか、ある親はわが子にはそのような憂き目に遭わせたくないと思って、有名私立中学を受験させた。受験会場に集まるのは皆、一様に家と塾、家庭教師などによって徹底的に鍛え抜かれた優等生たちばかりで、親の期待をその小さな背に背負っていた。将来はこうなりたい、ああなりたい、などと言っているのは本当に本人が思っただけのことなのかは定かではないにせよ、その話す口振りは大人ですら思わずたじろいでしまうほど、しっかりとしていて理路整然しているのだった。

一人の少年は、小学四年生の頃から塾に通い始め、五年生になると家庭教師がつき、そして六年生になったときにはその学力は、どの中学でも合格することが出来るだろうと言われるほどにまで達していた。母親は嬉しくて狂喜したけれど、本人の前では至って冷静

で、

「くれぐれも怠けちゃ駄目よ。こんな感じの成績を取ってくる子なんて、ごまんといえるんだから」

と、厳しく言っていた。少年は、内心ではどう思っていたのかは定かではないけれど、こくん、と小さく頷いて、また当たり前のように勉強机へと戻っていった。

あまりにも勉強に打ち込みすぎるあまりに、彼は風邪を引いていても構わず夜遅くまで問題集を解いていた。勉強は嫌いではなかったけれど、好きでもなかったし、ただ問題を解いて正答を出したときの喜びが堪らなくて続けている、というような感覚だった。ゲームや漫画を買えない代わり、と思っていたのかもしれない。そんな無理が祟って、彼は風邪をこじらせて肺炎を起こし、直ちに入院することとなってしまった。受験前のこの事態に母親が焦らないわけがなく、大騒ぎして無理なことを担当医にも言っていたらしい。子供ながらにもそれが恥ずかしくてならず、言いたいことも、自然と口も噤んでしまう。

個室を与えられていたので、もう体調も戻ってきて勉強出来る気が湧いてきたときには、本を開いてこつこつと勉強をしていた。親しくなった若い医師は、それを見て感心していたが、その医師もかつて同じような経験があったのか、彼からの相談に乗ったり、少しでも勉強を教えたりしていたようだった。もう退院出来るようになったら、母親の希望でまだ彼は病院に残っていた。

退院したのは受験まであと数日となった頃だったと思われる。小学校は当然その間は休み、そして受験までの数日間も、風邪が伝染るといけないからといって通わなかった。結局、一月はほとんど学校に通わなかったということになるだろうか。

彼の本命である学校、それと滑り止めとして受ける三校、そのうち本命の学校が一番初めに受験があるということで、母はそれまでの間やきもきしてしまっていて、とても落ち着いていられない。もうすっかり良くなったけれど、それでも心配が尽きない母は、もう

夜遅くまでの勉強をさせることはなく、ただひたすら彼の健康管理に努めた。

その甲斐があつたのだろうか、彼は無事に本命の学校に合格し、そして滑り止めとして受けた三つの学校全てからも受験番号が掲示板に張り出されていた。そのときの母には、息子の明るく開けた将来が見えるような気がして、今が人生で一番嬉しいと言わんばかりにあちこちに息子の闘いぶりを話していた。それがなんと恥ずかしいことか。

それに対して少年は、合格したということは努力が報われて良かったと思つけれど、母とは別のことを思っていた。これから、ますます母からの期待が膨らんで、今度は大学受験のときには今以上に張り切つてしゃしゃり出てくるのではないかと。年齢の割に大人びた考えの少年は、そんなことを考えていると、まだこれがほんの第一歩にすぎないということをよく理解していたのだった。

第一章 第一話【染井】 1

桜の咲く季節といえば、学生たちにとっては学年が一つ上がった
り、進学したり就職したりと何かと節目にあたる。そこには各々の
様々な思いがあり、決して節目だから気分一新しようという清々し
いものに限らず、希望通りの進路ではなく、渋々歩いている者もい
るのだということを忘れてはならない。ただ、そういった負の思い
に関しては、見事に桜の美しい色と景色によって曖昧にぼかされて
いる。誰もが幸せに包まれているかのような錯覚に陥らせる。

そんな学生たちの思いなど知る由もなく、桜は今年も人々に見せ
付けるように見事に咲き誇っていた。その学校に咲く桜は、特に染
井吉野が美しいと評判だったから、『染井の学校』との愛称が付け
られていて、通り行く人々の目を楽しませているのだった。

その染井の学校の高等部に進学したばかりの夏^{なつかり・あおい}菫葵生は、遠くか
ら見る自分の学校の桜の美しさに、ほうとため息をついた。中等部
から在籍して、もう四回目になるこの桜だが、初めて学生として見
た中学一年生のときには、狭き門を潜り抜けてこの学校に学生にな
れた喜びで感無量だったものだ。今ではすっかりこの学校の学生と
して染まりきってしまったが、それでもなお、やはり年に一度のこ
の季節限定で咲く桜を見るたびに美しいと感じる。こういうことだ
けは、慣れたくないものだと思っていた。

校門に近づくと、その木陰に四人の女子学生がいるのが、そわそ
わと落ち着かない様子でいるのが見えた。葵生はそれに気付いてい
たが、あくまでも気付かぬ振りをして、桜を愛でながらゆくりと校
門を通り去った。桜がはらはらと上品に舞い散るのを通り過ぎてい
く葵生の姿は、本当に桜の中に溶けていくようで美しく、その後姿
を見送りながら、女子学生たちは届かぬ恋心に胸をときめかせなが
ら、悲鳴とも感想を叫んでいるともつかぬ甲高い声を上げていた。

彼女らは葵生が中学生の頃から、第二、第四土曜の公立学校の休みの時になると、いつの頃からか現れるようになった。さすがに彼女らが受験の時には、その頻度は減ったものの、高校に進学したとあって、再び久々に姿を現したのだった。

そんな彼女らの目的が自分だと気付いてはいたものの、葵生は至って平静で、そういったことにはまるで興味が無いといった風情でいる。男子校で異性との接触のない同級生たちにとっては、例え会話が出来なくとも羨ましい限りであり、せっかく相手から近づいてくれているのに、なんて勿体ないという声も少くないのだが、女子と交わるなど煩わしいとは思えない葵生には、ただの雑音にしか聴こえないのだった。

そういうこともあって、葵生は実はこの学校に恋人がいるのだという噂が、まことしやかに流れたことがあった。染井の学校は男子校なので、その噂が本当ならば相手は男子学生ということになる。噂はあくまで噂であるけれど、学校でも目立つ美貌を持つ葵生のことを知る学生は、学年を隔てても大層多く、そのため真偽のほどを確かめようと、物好きな学生が探偵のように調べ尽くしたらしい。噂の内容は、高等部の誰それが告白したらしい、襲おうと計画している、だのといったものばかりで、何一つ確証を得られるものはない、具体的にどうだったのかを知る術もなく、探偵たちは結局自然解散となってしまうらしい。ただ明確なのは、葵生の妖艶な美貌に惚れ込んで、秘めた思いを持つ者たちが時々集まっては、そういう『ただならぬ思い』を吐露し合っている、ということだけだった。葵生はそういうこともあったからだろうか、男女問わず恋愛にまつわることには係わり合いになろうとしなかった。彼が決まって友人に選ぶのは、体を動かすのが好きであったり、大きな野心など持っていないような、はつきりとした性格の者ばかりだった。

葵生は、高校進学したことによって塾に通うことになった。進学

校に在籍していようと、学校の授業だけで大学に進学しようという者は少なく、遅かれ早かれいずれ塾や予備校に通う者が多かった。早い者は中学生のときから、既に大学進学を見通して家庭教師がついているほどだから、決して葵生も早すぎるとは思っていなかった。それに、中等部の頃、葵生の成績が伸び悩んでいたというのも原因のひとつだった。決して怠けていたのではないが、小学生の頃、まだ幼く遊びたい盛りにもかかわらず、多くの受験生がそうであるように受験勉強で閉鎖的な生活を過ごしてきた葵生は、中学生になってからは解放感からか、外の世界にも目を向けるようになっていた。染井進学までは塾は母親の車で送り迎えをしてもらっていたため、塾と小学校と家の世界しか知らなかったのが、電車通学になり、そして都会の物珍しい景色や人々に触れるにつれ、急に目の覚める思いがして、葵生も遊びというものを覚えるようになったのだった。母親があまりにも教育熱心で口やかましいものだから、一応家ではちゃんと勉強はしていたが、期待以上に伸びていないことを懸念した母親は、とうとう高校進学を機に、葵生をある進学塾に入れることにしたのだった。

その進学塾というのは、口コミでしか知られていない少数精鋭がモットーの塾だった。曜日ごとにクラスが設定されていて、高校二年生になると文理別、進学先別にクラス分けがなされ、決め細やかな指導がされているともっぱらの噂だった。稀に通りがかった人が知って、入塾してくることもあるそうだが、広告を出したりビラを配ったりと大っぴらにしていけないから、まさに知る人ぞ知るという表現が相応しいような塾だった。

元々は、葵生の中学時代の部活の先輩である、はるなり・とうし春成藤悟がそこに通っていることを知り、母親にそれをちらりと話をしたことがきっかけだった。母親もあちこちの塾や予備校を探し、資料を取り寄せていたが、葵生の先輩からの紹介という、その塾について調べたところ、そこが一番適しているのではないかということになり、通塾することになったのだった。もともと母親からすれば、葵生自ら塾

に行くことを志願してくれたようで、とても嬉しかったのだけれど。実際のところは何気なしに葵生が呟いただけで、塾に通うつもりなど毛頭なかったのだが、いつの間にか母親は手続きも済ませていて、使用する教科書なども既に取り揃えていたのだから、葵生は「また、いつもの暴走が始まった」とうんざりしていた。

とは言え、決して成績は悪くはないのだが、医学部に進学したいという目標がある葵生にとっては、このままの成績だとそれは厳しい、ということは自分自身自覚していた。だから、いくら目の上のたんこぶである母親の勧めであっても、今回は素直に従うことにした。いや、従うという感覚はなく、信賴している藤悟の紹介だからこそ行くというところが大きかった。

母は素直に葵生が塾に行くことを承諾したことを喜んでいた。葵生の心の中では、医学部に進学するのにこのままではいけない、という思いがあつたのだけれど、医学部進学希望だと言えば、きつと大騒ぎして「家庭教師もつけましょう」「医学部進学予備校にも通いましょう」などと言いついに決まっているから、自分の目標については一切話さないことにしていた。ただ、「国立大学に行きたい」とは言っているだけで、それは多くの染井の学生たちの目標であつた。

あまり多くの塾や予備校に通って、息も詰まりそうなほど勉強に打ち込むなんて嫌だ、と葵生は思っていた。にもかかわらず、医学部に進学したいと思っっているとは、なんともおかしな話なのかもしれないけれど。

母は頑として今回も小学生の頃と同様送り迎えをしようとしたのだが、さすがに高校生になったのだからと葵生は断った。断ったという言い方をすれば穏やかだが、実際のところは『突っぱねた』という表現の方が正しい。学校帰りに直接行って、帰りも一応終了時刻が定められているとはいえ、自習室に残りたいときもあるだろう、親の存在を気にかけて集中できないのは本末転倒、などと、もっと

もらしい理由をつければ、納得したようだった。

願わくば、良いクラスメートに恵まれますように、というのが葵生の本音だった。同じ勉強でも、楽しく出来るのならそれに越したことはないのだから。あの母親からの魔の手から逃れられる、とっておきの場所であれば良い、と思っていた。

塾の入り口の受付で名前を名乗り、教室に案内された。塾といってもさすが少人数制というだけあって、決して教室は広くない。中学受験のときに通っていた大手進学塾は、ビル一棟が塾の建物だったけれど、今回の光塾はというと、オフィスビルの中にテナントとして入っていた。オフィスビルなのだから、一応給湯室があり、フロアそのものは決して狭くはないのだが、教室として仕切られている都合上、全体的に狭いように感じられた。

案内された教室には既に何人かの学生がいた。制服だったり、私服だったりとまちまちだったが、これがクラスメートなのだろう。

「自由席、だって」

少しはにかんだように体格のいい少年が言った。

「どうも」

大学に入ればアメフトやラグビーに誘われそうだな、と葵生は思った。まだ初対面同士ということもあり、互いに会話がなく、緊張した空気が流れていた。互いに互いを探るような居心地の悪い空間が、葵生はとても苦手であつたけれど、時間が経って欲しいときに限って、流れはゆっくりになるものだ。最初は教科書を出し、ノートを出し、ぱらぱらと捲ったり、シャープペンに芯を入れたり、なにやかやと用事を作っていたが、それもなくなると、急に気まづくなった。

その場から逃げ出すように、葵生は席を離れた。時間潰しがてら、この塾内に掲示されてあるものを眺めることにした。

壁には、模擬試験の成績優秀者の名前が書かれてあるページのコピーが掲示されており、光塾内に該当者がいれば、そこにマーカー

が引かれてあつた。また、おそらく今年大学に合格したのだろう、大学名、学部名とその合格者の名前がずらりと並んでいた。葵生は自分の志望する大学の医学部に合格している人物を見つけ、少し安堵した。大手予備校に行かなくても、ここでも十分医学部は狙えるということか、と思うと希望が持てるようであつた。

国語、数学、英語の各教科の成績上位者の名前が張り出してあつたので、次は先輩の春成藤悟の名前を探そうかと、その場を動いたときだつた。少女の声が、不意に耳に入り込んできた。

「すみません、通してもらえますか」

葵生は自分が通路を塞いでいたことに気付いて、慌てて端に寄つた。何せ狭い廊下なのだ。

「すみません」

葵生が壁際にぴたりと背をくつつけながら相手を見ると、それはこれからクラスメートになるであろう女子高生たちだつた。今までに感じたことのない、ふわりと柔らかな空気が流れて、葵生は妙な感覚に捕らわれていた。同じ制服を着た二人が通つていったが、そのうち葵生に声をかけた方、つまり葵生が返事をした方の少女を見た瞬間、息が詰まりそうになつて俄かに心がざわめいた。彼女の顔に何かついていたのであるか、それとも人とは思えぬ般若の顔をしていたとか。いや、いずれでもなかった。

その場に残された葵生が、ただ呆然と彼女の後姿を眺めている姿が、教室の扉の硝子にぼんやりと映つていた。かつて見たことのない人種、とても言うおうか。葵生はごくりと唾を飲み込み、一瞬のうちに感じた奇妙な感覚の正体を探っていた。

互いに自己紹介をして、英語の授業が始まつた。今ひとつ授業に集中できないでいるのは、緊張のせいだけではない。皆が冷静にしているのが不思議に思えるほどに、葵生は落ち着かない心地でいた。自己紹介をしたといっても、一度に全員の名前を覚えられるわけがなく、まずは顔を覚えることにした。何人か過ぎて、同じ学校同

士が重なっていることが分かり、誰と誰が同じ高校だというグループ別に覚えることにした。効率のいい覚え方だったのか、意外とすぐに覚えられそうだった。

また、葵生自身も学校の同級生とクラスメートになった。日向柊ひゅうが・しゅ一とは同じ染井の学校で互いに面識はあったが、一度も会話したことがなかった。従って知人とすら言えるかどうかも定かではないほどだった。初めて簡単に挨拶を交し合ったといってもいいほどだったのだが、その日向柊一が自己紹介のときに、

「そこにいる、夏苺葵生くんとは同じ中学・高校の同級生です。彼は学校でも評判の人で、僕は足元にも及ばず、彼を目標にしています」

と言ったものだから、そのときに教室の空気が変わった。友人同士で少しざわつく声も聞こえた。その声色にはどこかしら妖しげなものを含んでいるような気がして、ぶるりと全身に戦慄が走った。気のせいだと思いたいが、台詞の字面だけを追ってみても、やはりただの関係ではない、と何も知らぬ他人が思つのも無理からぬことではないだろうか。葵生が戸惑いの顔で見上げたとき、日向柊一が目を細めてにつこりと、それも艶然という言葉が相当するような表情で笑ったものだから、葵生の全身は悪寒が走った。

そんな葵生の様子に気付いているのか気付いていないのか、次の葵生の自己紹介の順番を促しながら、日向柊一は着席した。あんな自己紹介をされたら、こういうときはどう言えばいいのだろうと、いつになく冷静な判断ができないでいた。

「夏苺葵生です。日向くんと同じ高校ですが」

同じ高校ですが、話したことがないので、これを機に話すようになりたい、と言おうとして口をつぐんだ。それを言うと、また面倒なことにならないかと、もう一人の自分が警告するので、

「クラスメートになったみんなとも、仲良くやっていきたいと思います。どうぞ、よろしく」

と、もしかしたら声が上ずっていたかもしれないが、どうにか無難

なことを言った。だから、及第点だろう、と葵生は密かに安堵の溜め息をついた。自己紹介『ごとき』で、こんなに気を遣ったのは初めてだった。椅子に着席すると、葵生はそつと安堵の溜め息を漏らした。

ところがほつとしたのも束の間、次はいよいよ例の、葵生が妙な感覚を覚えた少女の定番だった。収まりかけていた心の音が再び拍数を増やし始める。彼女はすつと立ち上がり、長い睫を開くと、黒目がちの目で皆を見渡した。

「冬麻椿希とうま・つばきです。相楽妥子さがら・やすこさんと同じ高校で、友人です。学校の聖歌隊のメンバーですが、勉強と両立できるよう頑張ります。よろしくお願いします」

端正な顔立ちが印象的な彼女は、目鼻口などのそれぞれが小さすぎず大きすぎず、上品に揃っていた。ただ美人というだけではなく、髪が短ければ少年と間違えられかねない、凛とした態度、張りのある声を持った、美貌の少女だった。

廊下で初めて彼女を見たとき、気品のあるその顔立ちや雰囲気、葵生はすっかり目を奪われてしまっていた。そして、声を聞いて態度を見た。ああ、なるほど、ただの綺麗な娘ではないから思わず惹かれてしまったのだと、葵生は思うにつけ、どうにも隣の彼女の存在が気になって仕方がなかった。

第一章 第一話【染井】 2

いくら気になっけていても、どんなに頭脳明晰でも、殊異性と話すことに關しては、葵生はあまりにも不慣れだった。あつという間に仲良くなつた塾生同士だが、どうしても葵生は女子生徒たちとは会話が出来ずにいた。男子校育ちだから、というのは言い訳に過ぎない。葵生以外にも男子校出身の者はいるのだから。普段ならば女子学生たちと話せなくてもそれほど焦ることもないし、煩わしさがなくていいじゃないかと思ひ切れるものを、何故か葵生はそわそわと落ち着くことが出来ない。

葵生は言い訳になるからと考えないようにしていたが、彼が奥手なのはひとえに母親の努力の賜物だった。小学生のときから、女子と接することのないよう、母親が防波堤となつていた。この年頃になると思春期に突入し、気が散漫になつてしまつて受験勉強に身が入らなくなるのを、母親は懸念していた。友人の子がそれで受験に失敗したと聞くと、自ら盾となり、葵生に降りかかるであろう誘惑を悉く撥ね退けていったのだつた。

当時何も知らなかつた葵生は母親の望みどおり、小学生の間は友人といえは同級生の男子ばかりで、放課後になれば塾か家庭教師という毎日を繰り返し、志望校に合格した。中学・高校は男子校だから、もう気持ちに異性に浮つくことはないと思ひ切つた母親は、ようやく葵生に対する監視の目を緩めた。

しかし葵生は聡い少年だつたから、中学に入ると、親にばれないように上手く発散させる方法を知つていた。部活に入るときも、もちろん反対には遭つたが、体力がなければ大学受験に乗り切れないのでは、人間関係を構築する上で、チームプレイは必要、などと理屈を並べ立てたところ、それはもつともだと母親は許可した。あんなわざとらしい説得に応じた母親は、すっかり希望通りの進路に進んだ葵生を信賴していたらしい。部活仲間とこつそり街中を歩いた

り、映画を観たりとそれなりに楽しんでいたため、決して抑圧された不自由な生活を過ごしてきたわけではなかったはずだった。

だが、高校生になって光塾に入塾して、いかに自分が世間知らずだったかをたった一日で思い知らされ、愕然とした。いくら知識が豊富でも、いくら世界情勢に詳しかろうとも、弁が立つとも、世の中には男女という二つの性別があり、異なる性別の人間と相対するときには、普段通り接しようとして試みても、それはなかなか難しくうまくはいかないということを、ひしと理解した。そればかりは机上の勉強でどうにかなるものではない。

出会ってから三週間経って、ようやく彼女に声を掛けられるようになった。女子の中でも特にすらりと長い手足を持ち、際立った美貌を誇る冬麻椿希は、その容姿と聖歌隊の一員という経歴から、塾生たちから、

「音楽学校の生徒みたい」

と言われていた。そのため、塾生の中でも早くも学級委員長格になってしまった秋定桔梗は、最初のうちは彼女のことを、「オスカル」と呼んでいた。体格のいい大柄の彼は、人の良さそうな外見に加えて興味の範囲が幅広いため会話の種類も豊富で、塾生同士がたちまち親しくなれるきっかけを作ったのも、彼が上手く取り持ったお陰だった。そんな桔梗もどうやら葵生と同じく、塾生の中でも特に異彩を放つ椿希のことが気になっていたらしく、特に彼女に対して話しかける割合が多く、視線にも熱いものが込められる。

「椿希は聖歌隊の中では、ソプラノのパートリーダーなのよ」

友人の相楽受子が言うのと、皆一様に意外だと言っていた。

「アルトだったら、なおさら格好いいのに」

長身の椿希は女子学生たちの中にと、なおさら髪さえ短ければ、さぞかしその美少年ぶりが話題になることだろうと思われるので、そういう発言も出るのだろう。

「人間、そんなにうまくいくはずがないの」

残念がるのは、おっとりとした外見の甲斐ゆり子で、かい・ゆりこ気の強い口

ぶりで言ったのは、同じ高校で友人の大隅茉莉^{おおすみ・まり}。こちらは、今流行らしい『コギャル』と呼ばれる格好を好むらしく、おそらく校則違反であろうが髪を茶色に染め、化粧を施しており、目の周りは黒く縁取られていた。靴下はわざとだぼだぼにさせて、靴の上に何重ものひだを作っている。ゆり子はそれほど派手ではないにせよ、やはり薄く化粧をしているためかほんのりと大人びた雰囲気があつて、二人は塾内でもやや浮いた存在のように見受けられた。それは見た目だけではなく、大学の附属高校の学生ということもあるのだろう。附属校なのにわざわざ塾通いしているのは、普通にしていれば内部進学、良ければランクの上の大学に進学したいという狙いがあるのかもしれない。果たしてそれが本人の意思かどうかは、別として。

「でも、夏苺くんも素敵じゃない。本当に綺麗な顔してるよね、羨ましい」

こういう会話を本人の目の前でするとは、なんという品のないことか、と葵生は呆れていた。溜め息が出そうになるのを押さえ、この手の話は苦手なので、返答をしないことにしていた。

「葵生には熱心なファンの女子がいて、よく校門の前で葵生が来るのを待つてるんだ」

日向柊一が得意そうに言う。いつの間にか、「葵生」と呼ぶようになっていたことや、何故他人のことなのにそんなに誇らしげなのかと、葵生は違和感を拭いきれなかったが、それよりも火に油を注ぐかのような柊一の発言に、葵生は眉間にしわを寄せた。

「へえ、みんな暇だねえ。でも、気持ちは分かるかも」

茉莉がちらちらと葵生の顔を見ながら言った。何かを訴えるような視線に、葵生は気付かないふりをして、教室の隅を眺めていた。塾でもまた追い回されるのかという気の重さと、椿希を桔梗に取られてしまったという悔しさと、それに対して何も出来ない自分と、打開策が思い浮かばない経験の浅さと、様々な思いがむっとした顰め面の表情を作っていたらしい。

「なあ、今、大丈夫か」

桔梗が覗き込むようにして言った。

「ああ、何か用」

気を遣うような物言いに、葵生は努めて気を悪くしていない風を見せようとぎこちなく笑った。

「今度、ゴールデンウィークキャンプがあるだろう。聞いた話だと、肝試しがあるんだって。なあ、椿希」

桔梗の体に隠れていた椿希が顔を見せると、葵生は作り笑顔を少し緩めた。

「私をここに紹介してくれた人が教えてくれてね。夜の肝試しは二年生が用意するんだって。じゃあ、私たちも来年は一年生に肝試しのお化けをやるんだね」

自己紹介の凜とした印象の強かった椿希だが、ここ数週間ずっと観察していて分かったことは、常時あのように堂々としていたのでなく、普段はもっとくだけていて、仕草や言葉遣いは気品があつて女性らしい。相楽妥子が言っていたが、「学校が女子校だからか椿希のようにすらりとした美人は人気で、中には『プリンス』と呼ぶ子だっている」らしい。

まるで、どこかの誰かみたいだな、葵生は自嘲気味に思った。だがそれと同時に、自分のあずかり知らぬところで賞賛されまくるだなんて、似たもの同士ではないかという仲間意識も感じて始めていた。いや、親近感を感じただけではないだろう。

椿希が女子校で『プリンス』と呼ばれて困っているだろう姿を思い浮かべると、少し面白い。いや、案外嫌がつていないのかもしれない。気が利いて、機知に富んだ会話があつて、それでいて優しいければ、それは紳士的な『プリンス』と周りは呼びたくなるのかもしれない。男である自分でさえそう思うのだから、きっと女子ならばさぞかし、と葵生はそんなことを想像しながら、葵生はにやにやと笑った。かつてならば「なんと下らないこと」と馬鹿にするようなことなのに、何故かその下らないことが面白くて仕方ない。

「じゃあ、『プリンス』は王子の格好をした亡霊で決まりだな」
からかうように言った。椿希が、「もうっ！」と軽く睨んだが、
すぐに頬を緩めて言った。

「でも、意外だった。そんな冗談言う人だと思わなかった」

近づきたい人だと思っていた椿希は、初めて葵生が笑ったところを見て、ついそんなことも口に出してしまうのだった。

「そうそう、もっとお堅い奴なのかと思ってたよな。何せ、あの『染井』出身なんだし」

桔梗も同意したことからすると、どうやら葵生は周りから堅物と思われていたらしい。三週間経つてもポーカーフェイスを貫いていれば、誰だってそう思うだろうが。

「堅いなんてとんでもない。こんな綺麗な顔して、バスケット部のエースだからね、葵生は」

茉莉たちと話をしていたはずの柊一が、どこから話を聞いていたのか、急に加わった。

「へえ、バスケットやってたんだ。それにしても、身長が」

椿希が、しつ、と目で合図を送ると、桔梗は慌てて口をつぐんだ。あまりにも瞬時に反応をされてしまったのと、嗜めたのが椿希だったということもあって、葵生は顔を少し赤らめた。既に完成された大人の体格に近い桔梗に比べれば、少なくともこの教室内全員が小さいと表現されてしまうだろう。決して葵生は自分の身長にコンプレックスを持っていたわけではないが、桔梗との差や長身の椿希を見てしまうと、どうしても気にせざるを得なくなってしまう。

「所詮弱小チームだったから身長なんてどうだっていいんだよ。確かに身長はバスケット部にしては低い方だけど、一般からすると決して低くないよ。ただ低く見られがちなだけで。なあ、葵生」

葵生の代わりに柊一がさらに続けた。自分の代理で答えてくれているとはいえ、これではまるで恋人同士、いや、寡黙な夫に代わって答える妻のようではないかと思うと、苛立ち始めた葵生は、せっかくの笑顔も立ち消えになってしまった。大体、何故そんなに詳しく

く自分のことを知っているのか、調べ尽くされているようなのがこの上なく不快で、こんこんと、机の端を爪先で叩いた。

「ねえ、葵生くんって学校ではどんな感じなの。美人さんだから、『その気』のある男子から告白されてたりして」

茉莉が鼻息荒く興奮しながら参戦すると、もはや葵生の出番は完全になくなった。葵生の深い溜め息も周りには聞こえなかった。あとは勝手に周囲が盛り上がるだけだ。面倒なことには手を触れない、君子危うきに近寄らず、の精神で葵生は話題から遠ざかっていった。

「確かに、べっぴんさんだよな。俺達の学校は公立で共学だけど、男女どっちにしてもこんな美人さんはいないよな」

桔梗の友人の綾部^{あやべ・しやうま}笙馬が、同級生の桔梗に向かって言った。笙馬をちらりと見ながら、彼もまた小柄ではないか、と内心では思っていたけれど、それを言うことでややこしい方向に話が向かっていくような気がして、黙して語らずの精神を貫くことにした。

「告白されてても、全然不思議じゃないよな」

桔梗が笙馬の言葉に対して同意すると、たちまち先ほどまで終一の演説に聞き入っていたはずの何人かがこちらの話に加わり始めた。葵生はすっかり呆れてしまっていて、明後日の方を見ながら何も聞こえないふりをしている。

「禁断の花園っていう感じよね。危険な世界だけど、気になる」
ゆり子は、もはや現実の世界ではなく、妄想の世界で言葉を発しているようにしか見えない。

「私は、葵生くんならたとえ男好きでも全然構わないわ」
茉莉も妄想の世界に入ってしまったのか、うつとりしながら言う。徐々に会話があらぬ方向へと向かいつつあるのを、誰も制しようとはしないのは、それほど興味深い内容だったのだろうか。

葵生は頭痛がしたような気がして、もう話をしているのを見たくもないと言わんばかりに仏頂面をしまっている。一方の椿希と受子はというと、あまりに白熱する周りについて行くことが出来ず、ぼかんと遠巻きに傍観していた。

「いきなり大スターだな。どうだ、気分は」

いつも教室の隅に座っている山城桂佑が、いまだに騒がしくあれやこれやと妄想話を繰り広げているのを見て、呆れたように言った。口数は少ないけれど、それがどこなく自分に似ているような気がして、葵生は塾の中でも気が合いそうだと思っていたのが桂佑だった。

「最悪だ」

桂佑はその返答に、ぶつと笑った。笑われたことで、葵生は顔を赤くさせたけれど怒ることもなかった。

「みんなが好き勝手言ってるから、私も言わせてもらっけど」
相楽妥子が、少し声を落として言った。

「私は、実は夏苺くんには椿希みたいな、正統派の子が似合うんじゃないのかな、なんて思ったりしました」

妥子はおどけたように言ったが、思わず葵生は顔を赤らめた。冗談で言ったのだろうとは思いながらも、椿希のこととなると敏感になってしまう葵生は、ときどきとしてしまつて椿希の顔を見ることが出来ない。ちら、と桂佑を見たら、桂佑はにやと笑っているものの、それについて何か言うつもりはないらしい。お喋りな奴でなくて助かった、と葵生はほつとした。

「ちよつと妥子、『清纯派』の間違いじゃないの」

当の椿希はというと、妥子の言うことに対してそういう風に切り返したのだった。葵生は顔を上げて、椿希を見ただけれど、普段からこの二人はそういう冗談を言い合っているのか、息もぴつたりの様子に見える。

「椿希が『清纯派』だなんて言ったら、学校中の女子が泣くですよ」

妥子はそう言いながら、ちらと葵生を見た。視線が合うと、葵生はまたも顔を赤くさせて目を逸らしてしまったので、妥子は苦笑いした。

「仕方ないか、私は『プリンス』だし」

椿希が肩を竦ませて言うのが、いかにもそれまでの会話が冗談でしたというようなので、葵生は呆気を取られて何も言えそうにない。それにしても、妥子が鋭く葵生の心を見破ったかのように言ったのがなんとも気恥ずかしくて、これから味方になつてくれれば心強いけれど敵に回したくない人だと思っていた。そして、改めて椿希もとても頭のよく回る人らしいというのに気付いて、それについては自分の想像通りで良かったと、密かに嬉しく思っていたのだとか。

第一章 第一話【染井】 3

第一章 第一話 【染井】 3

それから葵生は、妥子に「葵生には椿希が似合うと思う」と言われたことで、表面では何も感じなかったかのように振舞っていたけれど、何度その言葉を葵生は心の中で反芻しただろうか。しつこいぐらいに繰り返しても、全く飽きることがなく、時折表情が笑みを作ってしまっている。そう言われて嬉しくないわけがない。というのも一目見たときから、葵生は椿希の端麗な容姿や立ち居振る舞いに惹かれてしまったため、そんな彼女に似合うと言われれば、にやにやと笑みもつい漏れてしまうというものだった。それがどういふ感情の元かは、まだ経験の浅い葵生にはまだ分からなかったが、少なくとも他の女子に抱くものとは違うということだけはよく理解していた。

そう言う風に悶々と過ごしているうちに、椿希なら心を開いても大丈夫だろう、受け止めてくれるだろうと、葵生は漠然と思うようになっていたため、自然に心は開かれていった。ただ一点、この前の妥子の言葉に対して椿希が肯定も否定もせず、冗談めかして煙に巻いてしまったことだけが引つ掛かっていて、まだ今ひとつ葵生の心に自信を持たせることが出来ずにいた。

まだ出会って数週間ほどしか経っていないのだし、葵生はその間無表情を貫いていたのだから、そんな葵生に椿希がほかの男子と比較して興味を持つかと言えば、持たないだろうということが容易に想像がつく。むしろ秋定桔梗の方が、椿希にとっては近い人物のようで、休み時間のたびに雑談で笑い合う間柄なのだから、桔梗との関係が深まっているのは当然のことだった。人間、中身を知るにはやはり意思疎通が必要なことから、現地点では椿希にとって葵生は目立たないその他大勢の存在であっただろうと、葵生は客観的に

分析していた。

あれから一週間ほど経ち、光塾の学生たちはキャンプに来ていた。五月の連休の間、一年生と二年生は親睦を深めるためという名目で、キャンプに出かけるという行事があった。先輩の春成藤悟曰く、「いい発散になる」とのことで、葵生は初めての体験となるキャンプに参加できることを楽しみにしていた。

基本的に男子は薪割りや運搬などの力仕事、女子は調理といった担当になるのだと聞いていたが、たとえ面倒で苦勞する力仕事であってもやってみたいという思いが強かった。というのも、最初はキャンプとは名ばかりで、実態は勉強合宿であり、施設に宿泊して晩と早朝には試験があるという体裁であるとばかり思っていた葵生は安心していたし、純粹な意味の『キャンプ』を満喫出来るとあつてとても楽しみにしていたのだった。

集合してみてもキャンプに参加した人数が、思ったよりも多いのに驚いた。それまで会ったことのない同学年の別の塾生もいたため、見ず知らずの学生がほとんどだった。光塾の卒業生が何人か手伝いに来ていたが、彼らの中には幼く見える者もいて、塾生と間違えてしまいそうだった。

班分けは講師によつて学年やクラスをこえて編成され、葵生は同じクラスの中では、相楽妥子と綾部笙馬が同じだった。

「あら、残念。私じゃなくて、椿希の方が良かったでしょ」

わざと意地悪っぽく妥子が言った。

「そうでもないよ」

ぶっきらぼうに言ったつもりだが、確かにそう思ってしまったていたのを見破られていたのが、なんだか悔しい。見透かしたかのように、ふうん、と鼻を鳴らしながら妥子は葵生の表情から心を読み取るうとする。

「そう。じゃあ、仲良くなろうね、葵生くん。私を踏み台にしてもいいから」

あくまでも葵生が望んでいたのは椿希だろうと推し量って、妥子にはやにやと笑っていた。こういうことを言われると、昔は大抵不快に思ったものだけれど、何故なのか妥子に対しては全くもって頭が上がらない。それより、日向柊一や大隅茉莉らと別の班であったことの方が葵生にとっては幸いだった。キャンプに来てまで悩まされるのはたまったものではないから。

辺りは木々の緑で彩られ、あとは薄青の空に白い雲がうつすらとある。きらきらと木漏れ日が差し込むのが都会と同じ状態のはずなのに、何故か格別なもののように思えるから、場所柄のせいだろうか、しみじみとその景色に見入ってしまう。ざわざわと風に揺られて音を立てる葉や、清らかで濁りのない川のせせらぎも、スピーカを通して聴くものと違って、それが直接耳に入ってくるとなると心が大らかになっていくような気がする。

そんな風に感慨深く耽っているうちに、キャンプ場ボランティアスタッフから、キャンプ場での注意事項や飯盒炊爨についての説明を受けて、夕飯の準備に取り掛かることとなった。別働隊が車で運んできた食材を下ろし、少し離れたところに保管してある薪を取りに行く。班長の二年生が適当に役割分担を決め、素早く行動するよう指示が出る。まだ初参加の一年生にはよく分からない点多いので、その都度卒業生や二年生が教えたり説明したりし、またスケジュールが切羽詰っているということもあって、機敏な行動をするよう促していた。

キャンプは班行動が原則だから、自然と初対面である他のクラスや二年生たちとも会話することになる。比較的人見知りしやすい方の葵生も、こういう場になると無口を通すわけにはいかず、気が付けば、自ら話しかけていることが多かったのだ、

「やけに今日はよく喋ってるね、葵生くん」
食材を洗いながら妥子が言った。

「そうか。俺って、そんなに喋らない人間と思われてるわけか」

洗い終えた食材を、ざるに入れながら溜め息を吐いた。

「そうね、うん、多分大方のクラスメートはそう思ってるんじゃないかな」

「はあ、別に意識して喋らないわけじゃなくて、喋る必要がないから黙ってるだけなんだが」

葵生が学校では無口ではないということは、日向柊一がたびたび塾生同士の会話の中でしていることだが、塾内ではなかなか浸透していない。その理由は、葵生に代わって柊一がさもスーパースターのように学校での武勇伝を語っているというのに、肝心の葵生はそういう話に参加しないため、葵生とは寡黙な人間なのだという評判が立ち、いつしか誰もがそういう目で見えるようになっていた。

いい加減、周囲の熱も冷めてくれればいいのに、と葵生はよく思う。だが柊一の弁が立つこともあり、なかなかその様子は見せない。葵生が思うに自分の真実の姿からは五割増くらいに美化されており、実像に近いところで葵生のことを理解しているのは果たしているのだろうか、甚だ疑問である。皆が幻想を抱くのは勝手だが、葵生が塾生の中で心を許している相手である椿希や妥子に対してだけは、どうかありのままの姿を見て欲しいと、切に願うのだった。

呆れたように言い放った葵生の様子を見て、妥子はほんの少し同情した。

「なんとなく分かるよ。自分のこと言われっぱなしでちよっとうんざりしてるんでしょ」

水を切ったり、玉葱の皮を剥いたり、喋りながらだが手の動作はしっかりと動いているのに、葵生は少し感心した。

「柊くんもちよっと控えたらいいのに、って思うけどね。自慢なんだろうね、自分の学校にこんなにすごい奴がいるんだぞって言いたいのもかもしれない」

こんな風に二人きりで話したのは初めてだったが、こんなことを言ってくれたのは妥子が初めてだったので、感心して、

「しっかりしてるな。よく観察してると思う」

と、言ったのだった。なるほど、そう言われればそうかもしれないとようやく納得したもの、柊一がまた今頃余計なことを話して回っているのかもしれないと思うと、どうにかして黙らせたいところであるが。

「ありがとう。葵生くんにそう言われると嬉しいね」

妥子が洗い場での作業を終えると、野菜の入ったざるを持って炊事場へと運ぼうとした。

「おっと」

溢れてざるから落ちそうになった野菜を慌てて抑えると、妥子は小さくありがとう、と言った。この機会だからと思った妥子は、少し背伸びをして葵生の耳の近くでひそひそと囁いた。

「そうそう、椿希が言ってたよ。『葵生くんって、本当は無口なんじゃなくて、女の子が苦手なんじゃないかな』って。あの子もなかなか鋭いこと言うでしょう」

どきつとして、葵生は瞬時にして顔を赤らめた。あの校門で自分を待ち伏せしている女子たちも、同じクラスメートの茉莉やゆり子も、このキャンプに参加している初めて会った女子学生たちも、必要でないのなら話しかけたくないし、話しかけられたくもないため、避けていた。

避けている風なのを見せないよう、さりげなく会話の輪の中から外れるようにしていた葵生のことを、椿希は気付いていたのかと思うと、なんだか子供っぽいところに気付かれてしまって恥ずかしいやら、ちゃんと見ていてくれたことを嬉しく思う気持ちやらで、葵生はもそもそと心が落ち着きそうにない。

椿希を見た。こんなに人がたくさんいるのに、いとも簡単に彼女を見つけれちゃうのは、無意識のうちに彼女を目で追っていたからだろうか。ふと周囲を見渡しても、男子学生に引けをとらない長身、まだ少女らしさの残る未完成ながらも整った面長の顔立ちは、遠目から見ても彼女だと分かるほど、とても目立つ。

いつの間にか妥子はいなくなっていた。葵生は自分の持ち場へ戻

るが、その途中もなお椿希をちらちらと見ていた。椿希は同じ班である桔梗やその他のメンバーたちと、仲良く食材を切ったり会話したりと、楽しそうにしていた。何を話しているのか、くるくると変わる彼女の表情を、もつと見ていたいという願望を胸に秘めつつ、少しばかりの嫉妬を抱きながら、葵生は椿希が自分のことを少し理解してくれているらしいことが嬉しくて、少し柔らかな笑みを浮かべた。

こんな風に、葵生は椿希のことばかり考えていたので、それから少しも景色を楽しむ余裕もなく、ただ彼女が少しでもこちらを見て何か考えてくれればいいのに、と気掛かりでならなかった。同じ班でないからこそ、どうしても何を話しているのかが気になってならず、用事のあるふりをしてさりげなく彼女の近くに寄ってみたり、何か訊ねる用事を作って彼女に話し掛けたりしていたのだけれど、さて椿希は葵生のことをこのキャンプの間に考えていたのだろうか。

キャンプファイヤーは二日目で、一日目の晩は肝試しというスケジュールだった。夕飯の後片付けは一年生が担当するよう言われ、二年生はそそくさと肝試しの『仕込み』に取り掛かりに行ってしまった。ひととおりの仕事を終えると、講師や手伝いの卒業生たちもあちらこちらへと分散してしまい、すっかり人がまばらになってしまっていた。

すっかり暇になって手持ち無沙汰になってしまったから、時間になるまで、炊事場では談話会がぼつぼつと開かれていた。いつの間にか陽もすっかり沈んでしまい、先ほどまで強い橙色の光が差し込んで眩しいほどだったのに、今となっては視覚は炊事場の薄暗い明かりに頼るしかないほど、薄暗くなっていた。山の中ということもあって都会のさまざまな雑音の一切が聞こえず、ただ虫の音や風が吹いてさやさやと木の葉が擦れて聞こえるなどといった、自然の音が、少し侘しくも頼りない心地にさせられるが、そういった心情になったことは初めてだったため、葵生は不思議にも面白いと思うの

だった。

「妥子、葵生、これ」

綾部笙馬がテントに一度戻ったついでに、二人分の懐中電灯取って来て渡した。

「ありがたい。準備いいな」

手渡された懐中電灯の電源を点けたり消したりしながら、葵生は感謝した。

「持っていない方がおかしいでしょう。確かに琴には書いてなかったけど」

妥子と葵生は揃って苦笑した。ほとんど全員が何も言われなくても持ってきていたのだから、不覚としか言いようがない。二人揃って忘れていたとはなんという偶然かと笑い合いながらも、肝試しは山道を歩くのだから、薄暗い電灯では頼りにならず、懐中電灯がなければ最中のことが思いやられる。二人共とてもしつかりしてそうなのに、こういうつまらないことで抜けているとはなんとも意外だと笙馬は思っていた。

「妥子、肝試しは大丈夫なの。苦手じゃないかい」

気を遣って笙馬が訊ねると、妥子は一っりと笑って返した。

「うん、大丈夫。ここで『キャー』って言えたら、可愛いんだろうけどね」

笙馬は苦笑した。確かに、妥子はそういうことは言わないだろうから。

「だけど、椿希はああ見えて怖がりなんだよ。『プリンス』って言われてるわりに、ホラー映画も駄目で、絶対に観に行こうとしないの」

笙馬に言っているつもりだろうが、葵生にも視線を向けて含むように笑った。

「意外だなあ。凜とした印象が強いから」

笙馬が驚いたように言うが、葵生にとっては、それは全然意外なことではなかった。椿希は皆が思っている以上に女性らしいところ

があり、几帳面すぎず細かなところによく気が付き、それをさりげなく直すべきところは直しておくのだ。『礼も過ぎれば無礼となる』との言葉があるが、適度な礼を尽くすことの出来る椿希のことを、若くして今時珍しい嗜みを持つ人なのだと、しみじみと思う。

そして、彼女のノートにはは整然とした文字がいつも並んでいる。釣り合いの取れた美しい楷書体は、筆圧といい文字の大きさといい、硬筆の理想に適うものであり、達筆だと心底思った。女子が皆、字が上手というわけではないのは、茉莉のノートを覗き見たときによく分かった。その丸文字やだらしなく崩したような、とても小学校で習った平仮名や漢字から程遠い文字は、難解で頭痛がしそうだったものだ。そういうのを思い返すにつけ、まだ出会ってからほんの一月余りだけれど、こんなに揃っている人はそういないのではないかと、葵生は椿希のことを見ているのだった。

「おっと、そろそろ僕たちの班の移動時間みたいだな」

笙馬が声を掛けたのに近くの誰かが気付いて立ち上がったので、皆時間が来たことを知って、お喋りの続きをしたり、懐中電灯をかちかちと点けたり消したり遊びながら、ぞろぞろと動き出した。

懐中電灯を持っているとはいえ、暗い夜道はやはり心許ないもので、油断するとうっかり石に躓いたり足を滑らせてしまったりと、危ない。

「なんてことない散歩道だ」

葵生が強がって言った言葉に、妥子はくすくすと笑いながら、

「今の言葉を椿希に聞かせてあげたいわ」

と、こんなときでもからかうものだから、葵生は暗がりの中にいることをいいことに顔を真っ赤にさせながら、彼女が近くにいないことを想像してはますます顔を赤くさせるのだった。

第一章 第一話【染井】 4

夜道の肝試しは思っていた以上になかなか迫力があって、山の中で薄暗い電灯と懐中電灯だけを頼りに、いつ襲い掛かってくるかも分からないお化けにも気を遣わねばならないとなると、随分緊張するものなのだなど、葵生は思っていた。電灯に関してはキャンプ場という施設側の配慮なのかそれとも経理的な事情があるのかは定かではないが、道のところどころにある程度で、その光の届かないところを歩く時には、慎重にならねばならない。

そういうところを突いてお化け役は待機していたのだが、衣装に足を引っ掛けて怖がらせるはずが転んでしまって、結局笑われる羽目になってしまっていた。お化け役も「参った」と照れながら、「気をつけて」と送り出した。怖くはなかったが、なかなか楽しかったのである。

そうは言っても、暗闇の中を歩くときには足元に注意しなければならぬので、一層の注意を払っていたのだから、心配なのは妥子曰く『ああ見えて怖がり』だという椿希のことだった。男である自分ですら、夜道を歩くのに気が張ると思っただのに、彼女はこういう心地にいるのだろうと思ひ遣った。先にゴール地点に辿り着いた葵生は、椿希たちの班が来るのを待ちながら、きつとそれでも強がっているか、あるいはあくまでもどうということはない振りをして歩いているであろう椿希の姿を想像しながら、ちらちらと元来た道に目を遣っていた。

「椿希、どうしてるだろうね」

妥子がそんな葵生の気持ちを読み取ったかのように、呟いた。

「妥子、怖くなかった」

どうやら向こうでジュースが配られていたらしく、気の利く笙馬が三人分のジュースを持ってきた。

「私は全然。笙馬くんこそどうだったのよ。なんとなく、へっぴ

り腰になつていたみたいだけど」

つくづく妥子は観察眼が鋭い。道中の暗さに安心しきつて、自分の情けない姿をまさか見られているとは思っていなかった笙馬は、思わず顔を引きつらせた。

「怖い、わけないだろう。十六にもなつて、怖いわけが」

そう言う声もどこかしら上ずつたものに聞こえるのだから、妥子はそんな風に強がる笙馬を可笑しいと思った。

「はいはい。ごめんね、からかつて」

そんな二人の会話も、葵生には遠くの出来事のように上の空に聞いている。ちらちらと見ていたのを、笙馬と妥子の遣り取りを聞き流しているうちに、堪らず視線をじつとその夜道に向けるようになった。

月夜とはいえ満月ではなく、おぼろげに光るのがどこか寂しげで、心細くさせられる。頼りになるのは月明かりと星屑たち、そして一緒に歩く仲間たちと懐中電灯の光。しかしそれらもざわざわと揺れる木々の音や砂利を踏む音などが、不気味さを感じさせ、不安な気持ち膨らませていく。そんな風に思うと、葵生は自分こそが彼女の月明かりにはなれないだろうか、彼女が困っているときや進む道先を照らす光にはなれないのだろうか、珍しく情緒あることを考えていた。

向こうからぼんやりと光が見え、ゆつくりと近づいてきたと思つたら、ようやく待ち人の姿が見えた。近くまで来てその表情が分かったが、微かに笑みを浮かべてはいるが気を張りながら歩いていたらしく、ぎこちないものに見える。それに反して、葵生の表情は安心したらしく、ふわりと緩んだ。

「お帰り」

妥子が声を掛けると、椿希が安心したのだろうか、駆け足でやって来た。休憩所の淡い暖色の光は、いつも慣れている蛍光灯に比べるところとても弱々しく頼りないのだが、それでも夜道の闇に比べれば心強く感じられ、また友人が迎えてくれているところを見て、安堵

した様子だった。

「お疲れ様」

妥子が椿希を葵生たちのいるところへ連れて行く。

「ただいま」

柔和な笑みで友人に帰還の挨拶をする椿希は、流石プリンスと呼ばれるだけあり、自分の弱いところは人には見せず、何事もなかったかのように振舞っている。そんな風だから、笙馬が言っていたように、多くの人たちから『凜とした印象が強い』と思われるのだろう。この切り替えはほとんど無意識のうちに行われているのだろうが、葵生には少し寂しくも思えてならない。彼女にとっての月明かりは、今回はどうやら妥子だったらしい。

「怖くなかった、椿希ちゃん」

笙馬が声を掛けると、椿希はさっぱりとした表情で、

「大丈夫。だって私はプリンスだもの」

と言い張るのだった。笙馬はそれに安心したように笑っていたけれど、葵生は微笑みながらも心の中では、これは繕った姿なのだろうかと思心を抱いていた。

それからまた少し時間を空けて別のグループが到着し、そのたびにめいめい感想を言い合ったり、歓声を上げたりしているうちに、しばらくしてようやく全員がこのゴール地点に揃った。二年生もその後小道具を持って合流し、無事に肝試しは終了となった。

「みんな、星でも見に行かないか」

講師が言った。天体観測の出来る場所があるということで、全員がぞろぞろとその場所へ動き出した。誰一人先に就寝するとは言わなかったのは、皆、この機会に是非にも星を見上げたかったからというだけではなく、夢の世界にいるようなこの時を、もう少し楽しみたいと思っていたからに違いないだろう。まだ眠りたくないのだ。何よりこの天体観測など出来る機会は滅多にないのだから、興味を持つのは当然のことだ。まずは図鑑より星座や天の川などといった写真を見て感動し、次にプラネタリウムの人工の星を見て、本来

ならばこのくらいよく見えるものなのだと知っていたけれど、今回せっかく本物の星たちを見ることが出来るのだから、葵生の探究心や好奇心が騒ぎ出す。また、このような場面において椿希もいるということが、葵生にとっての非日常性をより特別なものに仕立て上げていた。

受子と並んで少し先を歩く椿希を見つめながら、葵生は、月明かりになれなくとも、せめてあの星屑のうちの一つになって、いずれは彼女にすぐに見つけてもらえる一等星になればと、ぼんやりと考え事をしながら歩いていった。辛いときや困ったとき、迷ったときに彼女の足元を照らし、安全を守ることに出来る存在になればなら、この上ない喜びとなるだろうと。

キャンプ場までの道のりで通ったところにある、と講師は言ったが、バスに乗っている間は皆景色よりもそれぞれの会話を楽しむのに夢中だったから、このような天体観測に最適な場所があるとは誰も気付かなかった。もうじき着くという場所には芝生が広がり、その中にテラスが設けられているのが見えた。

昼間だと、青い空に緑の芝生と森、そしてそこに木造のテラスがそれぞれの色を主張し合うことなく調和が取れて、きらきらと太陽の光を受けて朝露の滴がきらめくのだろうかと思うと、改めて見てみたい気持ちになる。街中のコンクリートで囲まれた生活に慣れきっている、本当に同じ世界にあるものだろうかと思うほど異なっていて、写真やテレビで見た景色がこうして眼前にあるとなると、その感動もひとしおである。

葵生はほう、と小さく溜め息を吐くと、しゃりしゃりとみずみずしい音を立てながら芝生の上を歩いた。この辺りに住めば買い物や通勤通学には不便だろうが、毎日が心洗われて邪念も憎しみも取り払われ、いらぬ心配などせず伸び伸びと暮らせるのではないかと、老成しきった風に葵生は思っている。

テラスで皆、体を仰け反らせて天体観測が出来るようになっていたのだと、卒業生の誰かが言つと、学生たちが幼い子供に戻ったか

のように、歓声を上げながらテラスに向かって駆けて行く。十代も半ばから後半に差し掛かると、初体験と呼べるものが徐々に減っていくものだが、こうして夜空を見上げることが初めてだという学生があまりに多かったようで、やれやれ体格はすっかり大人びた者もいれば、ませた口の者もいるけれど、やっぱりまだまだ子供だと講師たちは思い、微笑ましく見ている。そして思った以上に皆が喜んでるのを見て、いい経験をさせてやれて良かったと、後からゆつくりと歩いて来ていた。

「あらあら、テラスもいいけど、せっかくの機会だから芝生にころんと寝転がって見たいわ」

と椿希が言くと、妥子が「いいね」と興奮した様子で乗った。近くにいた葵生にも、

「もちろん一緒に来るでしょう」

と、妥子が目配せをするので葵生は苦笑いして渋々行く風を装っていたが、もちろんそれは本心ではなく、またとない機会だと内心は喜んでいっただけだ。

さりげなく椿希の近くに行き、「この辺りにしよう」と椿希と妥子が決めて座ろうとすると、さつと素早く椿希の隣に移動した。すると妥子の隣に人影がしたのでふと横を見ると、笙馬が何食わぬ顔で座ろうとしていた。もしかして同じ心を持つ仲間なのかな、と思ったが訊ねられるような状況ではなく、同じ班になったことがきっかけで妥子を意識しはじめたのだろう、と思って葵生は納得している。

「俺も混ぜて」

と、桔梗が四人の姿を認めてテラスからわざわざ芝生にやって来た。

「俺の隣で良ければどうぞ」

葵生が言くと、「では遠慮なく」と慌しく座る様子が、なんともこの静寂の中にある味わい深い情緒を壊しているような気がするのだが、桔梗はいかにも今風でさっぱりとしているから、しみじみと何かに浸ることはないのだろうな、と思って見ていた。

それからしばらくしても桔梗以外には誰もやって来なかった。皆もうパノラマの景色に圧倒されてばかりで、少しでも目を離すのが惜しくてならないのだ。テラスの辺りでは様々な声がひそひそと会話しているらしく聞こえていたが、やがて静まり、ほとんど聞こえなくなった。

そして芝生の上に寝転ぶ者たちからは、あれが何座であれが何と言う星だと、天体に詳しい者が遠慮がちに小さな声で説明しているらしい声が聞こえている。この静けさの中に身を置いていると、声を発するのも悪いことのような気がしてしまうのも、現代に生きる者が忘れてしまいそうになっている、ゆかしさだとか風情だとかいったものをまだ心が覚えていたのだな、とこの悠然たる自然のありがたみを感じ入っている。

しばらくして、手を突いて空を見上げていたのを止めて、芝生の上に寝そべった。こんなことをするのは初めてだったため、少し遠慮がちになってしまうのがまた、ゆかしい感じがする。優しいそよ風が頬を撫でて過ぎ去り、少し濡れた芝生の上をひんやりと心地良い空気が後に残して行った。桔梗が、椿希が横たわろうとする前に、石や尖ったものがないかを甲斐甲斐しく入念に確認していたのを、椿希が申し訳なさそうにしている。

「そこまでしなくても大丈夫なのに」

肝試しの間中から、ずっと椿希を護るようにしていたらしい桔梗に、「もういいよ」と声を掛けると手を引いたが、どことなくそれが残念そうに見える。帰ってきたときに椿希が顔が引きつっているように見えたのは、こういう理由もあったのかもしれない。あまり世話を焼かれすぎると確かに困るし、まるであらゆる行動を監視されているようで辛いよな、と葵生は思った。さりげなくするために、葵生は椿希が寝転がってから、ゆっくりと身を倒した。

仰向けになって空を見上げると、月明かりと星の光しくない暗い世界が広がり、なるほど静けさのことを『深々（しんしん）とした』

という形容詞を使うのも納得出来ると、しみじみと感じ入る。

そんな中、隣から感じる彼女の気配と息遣いに、彼女の体の方がぴりぴりと緊張して吊ったようになって熱を帯びているような気がする。こういう感覚はまるで初めてのことなので、葵生は鎮まらぬ体内の騒ぎのために、いかにして平然を保つかであれこれと思索している。

ふと彼女の方に顔を向けると、彼女はじっと瞬きするのを惜しむように空を見上げていて、感嘆しているのか時折溜め息さえも漏れ聞こえそうな様子である。

空には満天の星たちが輝き、時々流れ星となって空を駆け巡るのがなんと幻想的であることか、これがフィルムを通した映像ではなく、実の目で見ているのだと思うと、なんと宇宙は雄大で泰然としているのだらうと、人間の悩みなど取るに足らない出来事のように思えてくる。皆がそう感じ入り、中にはぐつと涙を堪えている者までするほどで、こういったことに感動出来るとは、様々な出来事で荒みそうになっても、やはり深層の部分では心が澄んでいるということなのだろう。宇宙に吸い込まれそうな気がして、まるで魅入られたかのようにじっとしたまま動こうとしない。

そんな星屑の下にいて、葵生は夜空の感動よりも心臓の動きが早くてたまらず、こんな風にわが身について気を揉んでいるのはこの中ではただ一人、自分だけではないかと思うと、たまらなく恥ずかしいと感じている。流れ星を見つけるたびに、妥子と椿希がきやあと小さく歓声を上げて、桔梗や笙馬もそれに加わって、興奮を無邪気に分かち合っている。自分ひとりが世界から取り残されたようなのに、それでも彼女の近くにこんなに長い間いるということが、信じられなかった。

「どうしたの」

椿希が言った。葵生の視線を感じたのだろうか、それとも一人はしゃがない葵生を不思議に思ったのだろうか、こちらに顔を向けている。いつものように何もかもを照らし出す明るい照明がない

分、彼女の端整な顔が影の部分と弱く青白い光に照らされており、それがとても幻想的に映っていた。それが普段よりもずっと大人びて見え、どこか艶やかさすら感じられるのが、なんとも美しい。長い睫が、自分を見つめるたびにぱちぱちと小さく動き、そのせいで葵生の心はちつとも静寂ではなくなっていた。

「いや、なんでもない」

少し声が上ずった。椿希の顔を見ているのが恥ずかしくて、視線を他所へ向けようとするが、彼女が呼吸するたびに動く胸や腹部のあたりを見て、ごくりと唾を飲み込んでしまった。その音が彼女に聞かれやしなかったかと思つて、葵生はもう堪らなく恥ずかしい。

「ほら、星が綺麗。こんな初めて。せつかくだし、目に焼き付けておかないとね」

葵生が心はどうにか落ち着かせようと、ようやく空に目をやったのを見て、椿希も視線を戻そうとしたが、その葵生の横顔が目に入り、思わず見とれてしまった。

「なんて綺麗なの」それが感想だった。皆が「美人」だと騒ぐし、椿希自身もそれは兼ねてから思っていたことではあったが、この至近距離で彼の横顔を見たのは初めてであり、しかもそれを夜空の下で見ているということに、彼の異なつた趣を感じずにはいられない。薄暗さで、彼の美しい輪郭や通つた鼻筋、品のある唇の形がよく強調されており、横になったことで、重力で額から地面にふさふさと流れる髪に見とれてしまった。

星の光や月の明かりが、まるで遠慮しているかのような細々とした頼りない光を放っているため、目を凝らさなければつきりと見えないけれど、女性とも見まごうほどの繊細な作りをした葵生の横顔があまりにも妖艶なのに、椿希ははっと息を呑んで思わず見入ってしまった。柊一が散々自慢し倒すのも分らないでもないほどの、彫刻的で艶やかな美しさが、なんとも罪深いように思えてならないほどであった。

「こんな夜はね、夜空の星屑が詩を紡ぐの」

受子が歌うように言ったのが、またこの雰囲気に適う声色で、風流じみている。

「星屑が詩を」

椿希の声が妙に色っぽく聞こえて、葵生はごくりとまたも唾を飲み込んだ。

「そう。ロマンチックでしょう。夜空の星屑たちの『うた』が聴こえるんだって」

詩か散文の一節を引用したのかもしれないにせよ、この神秘的な夜空に相応しい台詞を味わい深いと思いながら、葵生は聞いていた。迷信だの占いだのといった非科学的なものを信じてはいないけれど、本当に耳を澄ませば聴こえるかもしれない。こんなにも人を美しく惑わせる星たちを彼方に見上げながら、星と会話するように、葵生は誰にも見せたことのない秘めた思いを解き放ったのだった。

第一章 第一話【染井】 5

それから天体観測のあったその夜は、炊事場までは全員で戻り、その後は就寝する者もいれば、そのまま炊事場の光を当てに座談会の続きをする者もいたり、めいめい好きに過ごしたようであった。女子のほとんどは疲れ切ってしまったのか、すぐにテントへ戻って行ったため、残念ながら深夜の暴露話に参加してもらうことは出来なかった。

こういう時といえば、たとえば誰かと誰かが示し合わせてどこかで逢引をしているだの、恋愛関係が成立するだの、そういったことが起きるのだろうか、年頃の興味津津な男子たちは、あれこれ妄想を語っているのだが、生憎とそういったことは起きなかったように、怪しげな行動をする者がいれば後をつけて行って後で話のねたにでもしようと思っていただけに、がっかりさせられるような結果だった。講師や卒業生が付いているというのも理由にあるし、また妄想は妄想で秘めたまま行動に移すつもりもないというのが実のところであつたのだろう。

「大体、そういうのをする気すら起きないね」

桔梗がきっぱりと言つのを、周りは、

「一番桔梗がそういうことをするような気がしていたけどな。行動力あるし、社交的だし、なんと言つても俺様っていう感じなところがあるから」

と言つので、そんな風に見られていたのかと思うと、桔梗は少し恥ずかしい気持ちになる。

「まあ、確かに星空の下で好きな子を口説くというのは夢があつていいけどな」

笙馬がしみじみと言つのを、葵生はなんとも興味深く思つて聞いている。

「こんな夜は、星屑が詩を紡ぐんだぜ。そんなところで何をする

でもなく、色々語り明かせたら最高だなあ、って思うよ」

皆は適当な相槌を打って聞いているが、今日一日の笙馬の様子を見ている葵生は、自分一人が笙馬の思いに気付いていることが面白くて仕方なく、かと言ってそこで深く掘り下げて聞くのは体裁が悪いと思う、敢えて、

「じゃあ、うまくいったら成功談でも聞かせてくれよ。後学のために」

と言ってやると、笙馬は少し顔を赤らめながら、

「僕よりも、葵生の方が似合っている気がするよ」

と、しどろもどろになりながら言う。ここで女子がいれば葵生を中心とした話になっていくのだろうが、運のいいことに男子の集まりで話をしているため、笙馬は自ら墓穴を掘って皆からの質問攻めに遭うこととなった。だが、まだその相手が誰であるかはつきりと口にしないので、それがかえって葵生は面白くてならず、にやにやと笑いながら適当に笙馬をからかっていた。

それからの内容はともここでは言い表せないほど過激なものも含まれていたし、そもそも日付が改まってから数時間ほど続けられてしまったため、取るに足らないよやま話も多かったのだとか。なんにせよ、これほど後のことを何も考えずに、夜更けまで自由に過ごせたのは初めてであったため、つい話が弾んでしまうのも無理のないことであった。

葵生はというと、そんな話を聞きながら、いつも思いをかける椿希のことを重ね合わせていたので、誰かが恋人についての妄想話をすれば、椿希ならばどうするだろうと思って、どきどきははらしていた。だから、その次の日はまともに椿希の顔を見ることが出来なくて、大層困ったのだとか。

次の日は打って変わって一日雨がしとしと降り、葉から零れ落ちる雨の滴が土に跳ねて、あちこちに水溜りが出来ていた。施設によつては、屋根のあるところでキャンプファイヤーをすることが出

来るようなのだが、生憎とここにはそんなものはなく、室内でキャンセルサービスをすることが早々に決まってしまった。

当初するはずだったオリエンテリングについても、雨の影響で残念なことに道を大幅に変更せざるを得なくなり、時間が余ってしまったのでひたすら座談会が続けられることとなってしまった。そうなるってしまったのは、準備の足りなかったこちらが悪い、と卒業生たちは申し訳なさそうに頭を下げていた。

「なんだか今日の葵生くんは変ね。まあ、いつも無口だけど今日は特別に変ね」

と、妥子は気が付いていたのだが、流石の妥子も、昨晚の会話を聞いていたわけではないので、葵生が椿希と視線を合わせづらそうにしているのを不思議に思っていた。

「まあ、葵生くんがどうやら本当に椿希のことを気になり始めているらしいから、あまり私がおせっかいに手を出し口を出しては、かえって葵生くんも気が引けてしまうかもしれないから止めておこう。椿希にとっても、葵生くんは悪い縁ではないと思うけど、あの子は葵生くんのことを一体どう思っているのだろう。悪く思っていないようだけど、まだ色めいた風には思っていないようだし。そもそも椿希の恋にまつわる話は今まで聞いたことがなかったから、私が知っているはずもないのだけれど、椿希に合うのはこの人だと思う人がようやく現れたのだから、私も椿希がもしその気になってくれるのなら、出来る限りの手伝いはしよう。それにしても椿希と葵生くんが並んだときの、あの見栄えのすることといったら本当に溜め息も出そうなほどだったこと。椿希の瑞々しく華やかで、見る者を思わず微笑ませずにはいられないほどの美貌と、葵生くんのなんとも言えない艶やかで妖しげで、目を逸らすことの出来ないような魅力と、まるで正反対なんだけど二人が一緒にいると上手く調和されているのが、本当に出来すぎなくらい似合いだこと」

有り余る時間の中で、そんな風に妥子は二人を見比べて思いながら、時折眠気に引き込まれてうとうととしていた。言葉に出しては

言わないけれど、妥子がそんな風に思っていると葵生や椿希が知ったら、それぞれはどういう反応を見せるか、全く想像がつかないこと。

第一章 第二話【光】 1

深い溜め息を吐いて、まるでこの世が終わったかのように歩くのは綾部笙馬で、それはこの暖かな陽気には全く不似合いな様子である。猫背の状態で、憔悴しきっているような姿は、一体何があったのか、余程衝撃的なことがあったのかと思いきや、実際のところは中間試験の結果が悪かったことに加えて、模擬試験の出来が悪かったためだった。

試験ごときで悩まない、と豪語する友人もいたが、何分生真面目な性格の笙馬にとっては、『これごとき』のことであつても一大事なのだから、そうはいかず、こうして鬱々と悩んでいるのだ。

そういえば光塾の面々の親は、多かれ少なかれ教育熱心であるらしい。塾内一の秀才の葵生の親のことを聞いて、秀才とはこうまでして作らなければならないものなのか、と思つてぞつとしたものだが、その葵生と同じ学校に通う柊一の親も、小学四年生の頃から学校と塾の送り迎えは当然あつたというし、妥子や椿希も中学受験前は、とても遊んでいる暇なんてなかったと言つていたため、きっとそれが秀才となるうえでは当然のことなのだろう。

秀才と天才は違う、というのを思い知つたのは本当に最近のこと、秀才とは努力なしにはなることが出来ないもので、天才とは天賦の才つまり予め兼ね備えた才能のことで、言ってみればこればかりはどうしようもない。だが、秀才には誰だつてなり得る機会はあるということも言えると思うと、どう鼻屑目に見ても自分がその部類に入らないことだけは確実だから、笙馬の悩みはとても尽きそうにない。

笙馬は天才ではなくとも、秀才になればどれだけ良いだろうと繰り返し思い続けている。ああ、この小学校の時にしっかり基礎を勉強しなかったつけだろうかと今更になつて笙馬は深く後悔した。

小学生の頃は毎日が天国で、真っ黒に日焼けしながら太陽の光がさんさんと降り注ぐ中、朝から汗だく砂まみれになりながらサッカーや野球に励み、あちこちの皮膚を日焼けで真っ赤に腫らしながら虫を取ったりメダルを取ったり、さらさらと流れる透き通った綺麗な小川でサワガニやザリガニを取ったりしたものだった。お陰で常に腕や足には擦り傷が絶えず、保健室の常連となって教師を呆れさせていたものだ。今の小学生は到底そんな遊びはしていないだろう、と思うと貴重な経験をしたと自慢出来るとはいえ、あの頃あまりにも無邪気に遊びすぎたからか、読書する習慣を怠り、いつかはいつかはと思っているうちにその決意も延ばし延ばしになり、結果現在になって苦しむ羽目になった。

「国語を馬鹿にしちゃいけないよな」

そんな悩みを桔梗に言ったら、そういう回答をされてしまった。数学にしる生物にしる、何故か高校生になって急に小難しい言葉で問題を出すようになったのだから、まるで国語の試験のように真剣に問題を読まなくてはならないし、ましてや古文漢文なんてとても日本語とは思えないし、そもそも古文漢文を勉強する必要があるのだろうかと思える。英語も直訳なら出来るのだが、意識をするとなると語彙が少ないから小気味良い訳が引き出せない。

「ああ、本当に国語って大事だと思うよ」

笙馬は、またも盛大な溜め息を吐いた。別に中学受験をしたからといって国語が出来るようになるとは言わないが、あまりにも秀才たちとの差を感じてしまつて、過去の自分を叱つてやりたい気分になるのだ。好きこそ物の上手なれと言うが、せめて現代文を好きになれば古文漢文もそれなりにすらすらと頭に入ってくるものかもしれないが、こういうのも才能なのかも知れないと思うと、あまりに平凡すぎる自分が嫌になつてくる。

笙馬は過去を悔やみすぎる傾向があるが、決して昔から成績が悪かったわけではない。中学時代、定期試験は常に上位を維持し、周

困からの人望も厚く、生徒会の副会長まで務めたのだから、その活動振りたるや立派なものだった。

生徒会副会長だった頃の笙馬が特に力を入れたことといえば、生徒からの要望が圧倒的に多かった通学鞆の自由化だった。教科書やノート、体操服などで重た過ぎるのは毎日の通学に不便だからと、通学鞆の自由化を申し入れ、教師として鞆の自由化はある程度認めるが何でも良いというものではなく、あくまでも学校に来ているのだということを忘れないようにといくつか条件を提示され、その両者の間に立って遣り取りを続け、折衷案をいくつも出したことだった。

特に女子に多かったのだが、単にお洒落で可愛らしいデザインの鞆を持ちたいという理由だけで鞆の自由化を強く求める者もいたため、それでは自由化は受け入れてもらえないことを説得するのに随分と時間も力も費やしたものだ。教師も初めは黒または紺の、教科書やノートが十分に入るくらいの大きさのものに限定と言い張っていたのだが、それはなかなか難しいと、こちらへの説得も毎日放課後続けられた。

板ばさみは辛い、と何度も生徒会役員たちは泣き言を言っていたが、それをどうにか両者の歩み寄りによって自由化に漕ぎつけられたときには感無量で、何人かは感動のあまり涙を流していたものだった。

その生徒会での活躍ぶりは大いに評価され、実際の笙馬の成績もそれなりに良かったため内申点も申し分なく、そのお陰で県内トップクラスの公立高校に進学出来たのだ。

笙馬は決して日向にいて目立つ性質ではなく、日陰でそと支えてやる参謀的な役割が得意だったため、学生たちの間では地味な存在のように見られており、自分自身もそのように思っていたのだが、教師や学級委員、そして見る目のある学生たちは心の中では笙馬のような人物を、好ましく先々頼りになる人物だという評価を下していたのだ。

このことから分かるのとおり、笙馬は自分について過小評価をするきらいがあるのだ。

さて、成績のことについて話を元に戻すと、中学時代成績が良くても高校生になって突然落ちる者は珍しくない、とはかねてから聞いていたが、まさか自分がそうなるとは思っていなかった。

公立高校ならば、その学校の学生といえば内申点の良い者は本番の試験においてやや有利となる。笙馬もその部類に入るのだが、中学時代の基礎的な部分に関してはそれなりに自信があったため、高校進学時にはそれほど戦々恐々とすることなく臨むことが出来た。だが、いざ入学してみると、自分と同レベルかそれ以上の学生が多いのだから、それまで上位にいた者ですら下位転落という悲劇に遭うのも、考えれば理に適う話なのだ。そんなこと、理に適ってたまるか、と笙馬は思っていたのだが、自分がそういう立場になった今ではすっかり気弱になってしまい、揚々と掲げた旗も降ろさざるを得ないような、そんな心地悪さを感じていた。

「どうすれば、国語が上がるんだよ」

全体的に手ごたえの悪かった中間試験、特に国語はもう二度と解答用紙を見たくないほどの点数、平均点との差だった。何より論文が読めないのが災いして、試験範囲が分かっているのに、さっぱり筆者の意図が掴めず、ついに出題者の意図も分からないため、もはやどうしようもない。中には学校の程度が高いのだから仕方ないじゃないかと慰める友人もいたが、自信を打ち砕かれた笙馬にとっては、そんなものも焼け石に水に等しかった。

「出題の意図は慣れかな。あと、読書力がある人は論文であろうと、趣旨が掴めているんだと思う」

独り言が漏れていたのか、受子がそつと返事をしてくれた。その意見が今まで聞いていた気を遣ったような慰めではなかったこともあり、笙馬はそれを素直に聞き入れた。

「やっぱり読書量か。今からでも間に合うかな」

至極当たり前の答えだったが、他人に言われるとなんだか耳が痛くて堪らない。

「そりゃ、一朝一夕には上がらないけど、続ければボディブローのように上がっていくと思うよ。勘を養うっていう意味で、やってみる価値はあるんじゃないかな。意識としては勉強のためというより、教養のためにやるのもいいんじゃない」

そういえば妥子は国語と地理歴史が得意だと言っているだけあって光塾生の中でも文系科目に関しては妥子は常に上位にいるため、どことなく言葉に重みを感じられ、それは教師にとやかく言われるよりもずっと効果があるように思われた。

「分かった。ちよつとずつ頑張ろうかな」

「うん、そうだね」

妥子が笑ってちらりと視線を外すと、桔梗、茉莉らと話す椿希を見やった。

「椿希もね、実は国語が苦手と同じことで悩んでたんだ。あの子は元々本を読む子なんだよ。でも、不器用でなかなか成績に反映されなかったんだ。中学生の頃に国語の先生にアドバイスをもらって続けてみたら、ちよつとずつ良くなってきたみたいよ」

目を細めながら妥子が椿希のことを話した様子は、まるで可愛い妹を見るようで、本当に心から椿希のことが好きなんだと、笙馬は思った。その凜然とした容姿や明快な滑舌から、椿希が学校で『プリンス』と呼ばれる所以が分かると納得してただけに、妥子の椿希に対する見方や捉え方が他人と違うのに不思議な感覚がした。椿希もまた、口調や態度は他の塾生たちとは変わらないにしても、妥子に対しては心を許しているように見えた。

「いいコンビだね、二人は」

まるで姉妹のように見える二人を見ながら、笙馬は微笑ましく思っていると言った。

「ありがとう。笙馬くんも、良かったら椿希のこと、もっと違う目でみてあげて欲しいな」

優しい顔で笑う妥子を見て、キャンプの夜以来ずっとくすぶっていた、心の奥に目覚めた物の正体を、笙馬はこの日はっきりと自覚した。

初夏の爽やかな日差しを浴びながら、きらきらと水面の輝く川を横に自転車飛ばし、笙馬はフードを背中で揺らしながら図書館へ向かった。穏やかに吹く向かい風がとても心地良く、髪を靡かせ頬を撫でて行く。緑の芝生の中に建つ茶色の建物が見えると、笙馬は一刻も早く着きたいと、自転車の速度を上げた。

築何年にもなるその図書館は、流石に休日ということもあり親子連れが多くて、児童書のコーナーには何人もの子供たちが何冊も本を取って重たそうに運んでいたり、母親のところへ持っていったのは「これを読んで」と駄々をこねる子供もいたり、それはとても微笑ましく可愛らしい光景で、見る者の心を和ませる。

小学生たちが児童向けに書かれた推理小説や伝記物語などを手に取り、真剣な顔つきであれこれ本を探しているのを見ると、ああ、こういうことを過去にやらなかったのが今の自分をつくってしまったのだと、つくづく悔やまれてならない。そのなかの一人の少女に妥子の面影に似た子がいて、あまりにもじつと見つめてしまったものだから、少女は不審がつてさつと本棚を移動して笙馬の視界に入らないところへ隠れてしまった。ばつの悪い思いをした笙馬は、少し苦笑いを浮かべながらコーナーを移動したが、一体何の本を読もうとしていたのだらうと思うと、怪しませてしまったのがなんとも残念でならない。

そもそも図書館に来ることが滅多になかった笙馬は、ほとんど初めてと言っても差し支えないほどのこの場所を、味わうようにゆっくりと歩いて見回っていた。人の話す声が時折聞こえるとはいえ、図書館という場所柄人がたくさんいるというのにほとんど音がないうというのがとても不思議で、ここがまるで神聖な場所であるように感じられた。

こういうところに妥子は普段よく通っているのだと思うと、妥子が今この館内のどこかにいるのではないかとときどきして、周囲を見渡してしまう。しかしそういう偶然に巡り会うこともなく、笙馬はややがっかりしながらも、このことをねたに妥子とまた会話が出来るのではないかと思い直すと、本を探しにまた歩き出した。

全く動機がこういうことで情けないと思うが、妥子と出会えたお陰で自分の運命が好転するのであれば良いではないかと、余計な自尊心などかなくなり捨ててやろうという気になる。育った環境が将来を左右するというのなら、出会った人間によって良い方向へ向かうというのもまた、あっても良いのではないかと思いながら、本を次から次へと手にとってあらずじを読み始めたのだった。

第一章 第二話【光】2

さて進学校においては、受験準備をするのに学年は関係ないと言つが、一年生であつても早々に模擬試験を何度も受けてきた葵生は、少しずつだが着実に成績が伸びているのが分かったし、手ごたえもあつたのだった。進学校の中で上位に食い込むのはなかなか至難の業なのだが、この調子で行けばそれも遠からぬ未来のことであらうと予想された。

葵生がまだほんの小学生のとき、夜遅くまで受験勉強していたのが祟つてなのか、風邪をこじらせてそのまま肺炎になつてしまい、緊急入院してしまったことがあつた。体は言うことを効かなくて不快感と倦怠感で堪らなかつたが、考える力だけはしっかりあつたのか、この大事なときにどうしようという焦りの気持ちで、ゆつくり休んでなどいられなかつた。だが、あの口喧しい母親がいかにも根治の難しい大病を患つたかのように大騒ぎするのを見ると、次第に冷静になつて来て、いい加減恥ずかしいから止めて欲しいと口には出さないが、そう思つていた。

そんな葵生の複雑な思いに気付いたのか、若い医師　今にして思えば研修医だったかもしれない　がいわゆる『お目付け役』となつて葵生の部屋をたびたび訪れては、あまり深く沈みこまないよう励ましてくれたのだった。

「そつといえは俺も、葵生と同じくらいの時に中学受験したんだけどな、うつかり風邪をこじらせて気管支炎になつたことがあるんだ。まあ肺炎じゃなかつたから入院はしなかつたけど、あのときにゆつくり休んで体力つけたお陰で、受験前のラストスパートを乗り越えられたもんだ。直前じゃなかつたのは運が良かったじゃないか。今のうちに出来ることだけでもやつておけばいい」

それからまたたびこの若い医師は葵生の部屋を訪れては、何かと話しかけてくれたお陰で思つたほど寂しくも退屈でもなく、むし

る退院するときの方が心残りでならなかったほどだった。葵生もありはつきりとは覚えていないのだけれど、思えばこの出来事がきっかけで医師になりたいと思うようになったのかもしれないのだとか。それまではただ漠然と、母親に言われたから受験勉強をしていたので目的意識などなかったのだが、こうしてはつきりと目標が出来る、退院後はその小さな体のどこにそんなに力があるのかと思うほど、ことさら熱心に勉強するようになった。こういうとき教育熱心な母親がいて助かったと思ったのは、勉強すればするほど母親は喜び、集中出来る環境を整えようとしてくれることだった。

こうして見事、染井吉野の花で有名な第一志望の中学に合格したのだが、葵生は合格したことに満足してしまい、病院での決意は一体どこへ行ったのやら、夢も少しずつ色褪せて来て、本当に何がしたかったのかと思っているうちに、なんとなく勉強をしているだけになっていた。親もほどほどの成績を取っていれば何も言わなくなったのは、将来は結果的に難関国立大にさえ入れば、文句はないからだった。

そんな衰えかけていた情熱を呼び覚ましたのは、光塾に入ったことがきっかけであった。その光塾の塾生たちを見ると、高校入学時の偏差値だけで判断するならば、進学校またはそれに準じる学校に通っているのは全体で見ても六割を超える程度かと思われた。

その中でも葵生と柊一の通う学校と言えば、進学校中の進学校と呼び声の高いところであり、学年のほとんどが国公立大学に進学し、男子校ということもあるせいか医学部または法学部進学率が他校に比べて顕著に高い、という実績をもう何年も残している。

それなのにどうということなのか、偏差値というものはまるで存在しないかのように、少なくとも一年生の間、光塾では成績の上も下も関係なく机を並べて授業を行っているのだ。授業の程度はというと、ちょうどいい進度、ちょうどいい難易度であり、特に不満はない。

時折、茉莉が「授業が分からない」と大騒ぎするが、それを周囲

が休み時間になると教えて、どうにか間に合わせている。分からない側にとっては助かるし、教える側にとっては教えることにより、自分が果たして正確に理解出来ていたかを再確認することが出来るのだから、双方に効果がある、というところだろうか。

さて先日行われた統一模擬試験の結果が返ってきたのだけれど、まだ高校一年生の春ということもあって受験した高校にはばらつきがあり、正確とはいいがたいのかもしれないが、受験した学校には進学校も多く含まれていたこともあって、大方自分の实力を知るに信頼出来る試験であったようだった。

「すごい」

教室中に驚き呆れる溜め息が漏れ聞こえたのは、葵生の成績について、受験した国語、英語、数学の三科目全てにおいて好成績を残しており、これといった死角が見当たらないためだった。

実のところ、葵生自身の成績も過去最高のものであり、それは苦手だった英語が今回は妙に出来が良かったことが大きな原因だろうと、葵生は分析していた。学校内での順位が成績表に載っていたが、足を引っ張っていた英語が上がったことによって、初めて上位と呼べる順位にまでつけることが出来、医学部進学のことを思えばまだまだ満足してはいけなのだけれど、ひとまず安心といったところだろうか。

「そんなにすごい成績なのか」

やや呆れたように山城桂佑が言ったのだが、桂佑は今回受験をしなかった面子の一人であり、想像し難いのか話題からは蚊帳の外にいて、冷めた目で成績のことで盛り上がる塾生たちを見ていた。

「そりゃあ、大抵はあっちが立てばこっちが立たずになるだろうに、三科目が揃ってしまっているなんて、すごいと思うな」

笹馬がそう言って、手元にあった試験結果と見比べて溜め息を吐いた。

「やっぱり、染井には適わないのかな」

笙馬は内心はとても辛いんだけど、お手上げだという風に両手を軽く挙げて見せた。今回の結果は大方分かっていたけれど、それでも心の内では「もしかして」と僅かばかり期待していたので、本当に残念そうである。

「まだ俺たち一年生だろう。俺はこれから追いつくぞ」

いつも自信に溢れていて強気の桔梗が、笙馬を軽く見ながら言った。ちらと自分の成績表の数字と比べると葵生のそれより見劣りしてしまっているのだが、断固として負けを認めたがらない桔梗は、感想を述べるのもそこそこに、成績表をさっさと鞆にしまい込んでしまった。

それから授業中になって、講師が先日模擬試験を受けた者の成績表を回収して回り、それから一週間ほど経って塾内の掲示板に総合成績と各教科別にそれぞれ上位五名までが貼り出されていた。

葵生が塾に来るなり、廊下に見慣れた塾生たちが集まっているのに気付いて見に行つたところ、総合成績と数学では葵生が一位を獲得していたのだが、英語の上位者表を見たときに、葵生は驚いた。

見間違えではなく、一位のところに冬麻椿希の名前が記されており、その得点と偏差値を見ても、二位以下を大きく離れていたのだった。

思いがけなく椿希の名前を見たことで、葵生は緊張と共に何故だか急に胸に突き上げられるものがあり、呆然とした様子で成績表を見上げていた。葵生がいることに気付いた塾生たちが、やんやと囁し立てて持ち上げたり感想を聞こうとしたりするけれど、葵生はそれに対して適当に答えるだけで、真剣には応対するつもりはなかった。それよりも、是非とも椿希に会って、この結果を見てどういう反応をするか、この結果のついでに椿希と話が出来ないかなどと考えていたためである。

しばらくして椿希が妥子と共に制服のままやって来て、二人共掲示板の成績表を見てそれぞれ反応を示した。

「やっぱり椿希、英語一位だったね」

と、妥子が言った。

「妥子は国語が一位だね」

と、椿希が言つて、それぞれの健闘を称え合っているのが微笑ましい。そんな中を割つて入るのは申し訳ないと思つていがた、葵生がいることに気付いた妥子が、

「あら、総合成績と数学一位の夏苺くんじゃありませんか」

と、おどけた様子で言つたので、葵生は思わず頬を赤くさせそうになった。

「私は数学が良くなかつたから羨ましい」

椿希は心底そう思っているらしく、溜め息を漏らしながら言つた。いつも穏やかで柔らかい表情をしていることの多い椿希が、少し残念そうにしているのは成績のことで納得のいく結果が得られなかつたからであろうか。

「俺にとつては英語が苦手だから、どうすれば成績が上がるのか、ご教授いただきたいほどだね」

と、少し声色を変えて言つてみたところ、椿希がふつと吹き出すように笑つた。どんな人でも笑顔が一番美しい表情であるのだが、特に椿希の場合その端麗な容姿もあいまってことさら優美で愛らしいので、それを見た葵生は満足げに微笑んだ。

それぞれ模擬試験の結果で思うことは多様にあつたようだが、葵生については、ひとつ目標が定まってこれからその達成を目指そうと決められたので、得るものが大きかつたようだった。

そんな模擬試験のちよつとした騒ぎがあつて、初めて塾生たちの中で成績優秀者が誰かがおおよそ掴めたわけだが、その成績優秀者の一人に選ばれたにも関わらず、葵生は少し落胆していたのは誰も気が付かなかつただろう。

あの春の連休中のキャンプより椿希に対してときめく気持ちを抑えきれず、常に視線が彼女の姿を追つていたのだから、彼女自身ですらおそらく気付いていないような小さな癖も、疲れた表情も見逃さないでいた。椿希は大抵うつすらと笑みを浮かべていることが多

いので、見ているだけでも心にあるわだかまりも黒く渦巻く野心も消えてしまいそうである。だから葵生は塾の席については、黒板を見るときに視界の端に彼女の横顔が見えるような位置に常に座っており、その場所を固定位置にするため、早く塾に来ては席を確保していたほどだった。

授業中、左手で頬杖をつくの顎に指の第二関節をそつと当てている姿が上品で、板書されたものを写し取るときの姿勢も背筋が通っていて、その肩にさらりとかかる艶やかな黒髪が蛍光灯の光を受けて光沢を出しているのが、なんとも美しい様である。油断すると、そちらにばかり目がいつてしまいそうなので、葵生は十分に気をつけていたが、ついついそれを見るのが楽しみになってしまっていた。高校生になってから葵生と知り合った者にとっては、別段気に入るほどのことでもないのだけれど、中学時代から知っていて葵生をよく見ていた柊一は、そんな葵生の行動には少し驚いていたようだった。

以前にも述べたように、同性から思いを打ち明けられたことがあるのではとの噂が流れたのも、異性に興味を示す様子がなかったためだった。もしあの校門前でどきどきと胸を高ぶらせながら葵生が通り過ぎるのを見守る女子の誰か一人にでも、会釈のひとつでもしていたなら、柊一も敏感に葵生の態度の違いに気付くこともなかっただろう。

高校生になって、そんな葵生の意外な面を見てしまった柊一は、表立ってそのことに触れなかったけれど、内心はとても口惜しく、元々の血色の良いとはいえない顔をさらに青白くさせて見ていたのだった。

さて、そんな葵生が椿希のことをいかに気に掛けているかというのが分かる話がちょうどこの頃にあったので、お話しすることにした。

キャンプが終わってからおよそ二、三週間ほど経ったはずなのだ

が、椿希がどうやら未だにあの連休中の疲れが取れておらず、少し気だるそうにしている、時々机に伏せるようにしていることがあった。眠たいからと、突っ伏して眠る者もいるので一見ただけでは判別が付き難いのだが、椿希の場合はことなく眠いからというよりは体全体が重たそうで、明朗な性分には合わない感じがちなさが、葵生の勘ではあるが体調が悪いのだろうかと思わせた。

「寝不足かもしれないわ。そろそろ中間試験だから」

と、椿希が自分自身の体調管理の甘さを指摘してみせた。椿希は努力家で、少々のことをなら無理をしても貫徹させるようなところがあり、そういうえばキャンプの時でも人一倍動き回っていたことを思い出すと、葵生は心配で堪らなかった。だがそれを言える勇気のない葵生は、せいぜい、

「くれぐれも度を越さないことだな」

と、さりげなく言うことぐらいしか出来なかった。葵生の心の奥深くで椿希への慕情が募っていることなど知らぬ桔梗が、

「椿希が休んでいる隙に英語を勉強するつもりだっていうなら、俺も便乗するよ」

と、言った。桔梗もそういえば椿希のずば抜けた英語の成績に衝撃を受けていた一人で、しばらくの間方々でそんなことを言っていた。にやり、と口の端を持ち上げるようにして笑うのは桔梗の癖で、彼なりの不敵な笑みの表現なのだろう。もちろん本気で打ちのめそうとは思っていないけれど、素直になれない性分からか、そんな風に絡むことで意思を伝えようとしていた。

そんな二人を椿希が微笑むように見ていたので、葵生は照れてうまく言葉を口に出せなかったが、休み時間の終了の間際にようこのことと言えたのだった。

「体には、気をつけて」

それを聞いて椿希が「ありがとう」と、柔らかな笑みを浮かべたので、葵生はますます愛しさを募らせていく。本当に彼女にどんどん惹かれて行っていると自覚しているだけに、椿希の前で無様な格好

は出来ないなど、葵生は家に帰るとそれは熱心に集中して勉強をしていたのだった。

ただ、身長があまり高いとは言えず、椿希ともほとんど差がないのを気にしてか、あまり夜更けまで勉強することはなく、きちんと一定の睡眠時間は確保していたのだとか言うことも、余談としてではあるが付け加えておくことにしよう。

第一章 第二話【光】 3

夏苺葵生は、元来あまり細かなことは気にしない性格で、何かいさかいがあつても水に流してしまおうとするところがあつて、細かなところに気付いていても気に留めないようにしている。気にし始めたらきりが無い、と思つてゐるからなのだが、近頃どうしてもこびり付いてしまった悩み事があつて、それは時折ふとした時に思い浮かんでくるのだから悩ましいことである。

それまで経験したことのない胸のときめきと、心のざわめきを抑える術を知らず、いつの間にか視線は彼女にばかり注がれ、何かをする時にでも彼女がもし見ていたらとつい考へてしまふのは、恋に堕ちたからだというのだろうか。

冬麻椿希という少女のことばかり、寝ても覚めても四六時中考へてしまい、この前彼女とこんなことを話した、あの時笑つた、ああいう癖がある、こんな一面がある、などと、よくもまあはつきりと覚えてゐることである。通学途中はまさにそのことを思い出すよい機会で、繰り返し思い返しては、思わずにやけてしまいそうな口元をどうにか押さえ込むのだ。

それにしても、彼女と出会つてからよく同年代の異性を観察するようになつたものだが、可愛らしいと思う子はよく見かけるのだが、はつとするほどの美人というのは少ないものだということに気付く。椿希のような子はそうそういるものではないのだと思うと、ますます夢中になつてしまいそうである。

凜とした佇まいの中に秘められた、女性らしい柔らかな物腰と気品ある言葉遣い、機知に富んだ会話は聡明な葵生にとって、非常に手応えのあるもので、少しずつ心に深く染み込んで行く感覚がまた、椿希のことを忘れさせないものにさせた。

物事を観察する際の洞察力も鋭く、それでいてそれを言葉にするときには相対するものを闇雲に批判するのではなく、丁寧に聞き手

を素直に聞き入れさせるような、柔らかい口調で言葉を選びながらなので、自分と異なった意見であっても、それも一理あることだと受け入れやすくさせている。

そして聖歌隊で歌を習っているからなのか、感性も人一倍豊かであった。研ぎ澄まされたその感性や情緒を解する心の有り様を見ていても、こちらが見習いたいと思うほどで、学業面では葵生の方が優れていても、音楽のみならず美術にも造詣が深いので、芸術の方面では是非彼女に色々と話聞いてみたいと、心は惹かれてしまっている。

彼女といると、自分も新しい何かを吸収することが出来るし、自分の持つ知識の水準を下げることなく会話が出来る、それは非常に心地良いものだった。毎日が刷新されるような清々しさから、塾へ行くのが楽しみで仕方ない。

ある日の放課後、その日は部活がなく、塾に行くまで時間があつたので、級友たちと体育館でバスケットボールを楽しんでいた。元々体育会系の部活といっても大会で入賞を狙うような強豪校ではないので、それほど熱心に活動しているわけではなく、空いた日には自由に使っても良かったので、時々こうして友人たちと遊ぶことがあつたのだった。

葵生はボールをぼんぼんとつきながら、間合いを取り、規則正しく弾ませていたのを隙を突いて乱し、一気に攻め込んで走り抜き、そのままゴールに入れた。風のように駆け抜けて振り返ると、仲間たちと軽く手を叩き合った。

肩で息をしながら、体力は消耗されてはいるものの、日常の様々な苦労や悩みをこうして晴らしているためか、皆の表情は一樣に明るい。鞆を投げ出し、学生服を脱いで激しく動き回るのは、久しぶりに身も心も自由にさせたことで、すっかり身軽になってしまったようである。

本気で勝負しようとは思っていないので、敢えて得点板も倉庫か

ら引つ張り出さず、笑いふざけ合うことも多かった。

そろそろ塾へ行く時間になったことを体育館に掛けられた時計で知った葵生は、汗を念入りに拭いて鏡で髪を整え、学生服の身なりを気にしながら、いそいそと帰る準備をしていた。妙に浮き足だっているのが周囲の目から見ても明らかだったのか、級友の一人が、

「色男の夏苺くん、今日もお前には勝てなくて残念だよ。そんなに慌てているけど、もしかしてその塾には小督の局でもいるのかな」とからかい、周囲も興味深々といった様子でにやにやと笑いながらこちらを見ている。小督の局とは、平家物語に登場する人物で、この前の古文の授業に出てきたのを持ち出して言ったことであつた。すると、別の誰かが、

「小督の局とはまた良くない例だなあ。それだと結局最後は悲恋なんだから、どうせなら紫の上にしておこつよ。夏苺は差し詰め光源氏ということだ」

と揶揄した。そして「若紫だと、夏苺が危ない人に思えるだろう」と付け加えたのは余計なことである。だが、そんな風に言われても葵生は上手いこと言うなあ、と思うばかりで嫌な気持ちにはならない。ただ少しばかり気恥ずかしいのだけれど、

「紫の上はいないけれど、そのうち出てきたらいいよな」

と、葵生は曖昧に答えた。それにしても同級生で同性ながらに惚れ惚れしそうな容姿であるから、女子高生の恋人を作るなんて簡単だろうと、ここにいる皆は胸の内では思っている。とはいえ、やはり以前から追っかけの女子学生に対して、冷淡な態度を取り続けたことを思うと、なんて勿体ないと返す返す思ってしまう。

去っていく姿までが夏苺葵生という俳優か、夏苺葵生を演じている誰かを見ているようで、なんとも不思議な魅力を持った人だと返す返す思ふのだった。

電車に乗るのに駅のホームで待っていたら、背後から声を掛けられたので振り向くと、そこにいたのは塾生であり、高校の同級生で

もある日向柊一であった。

「奇遇だね。今日ももしかして体育館にいたの」

柊一は葵生と偶然会えたのが嬉しいのか、色白の顔にほんのりと赤く頬を染め、目を細めながら言った。

「まあな。そえにしてもよく知ってるな、時々体育館で放課後遊んでるっていうこと」

知られて疚しいことはしていないけれど、ここところ柊一は葵生のことなら何でも知っていると云わんばかりに、塾生たちにあれこれと葵生のことを吹聴して回っているの、あまり良い気持ちではない。柊一は誤魔化すつもりなのか、笑ってそれに答えようと思わない。

そういえば、先日友人に、

「最近、日向とよく喋ってるけれど、あれは塾の話でもしてるの。夏莉と日向が仲がいいっていうのはなんだか違和感があるし、妙な組み合わせだなんて思っているものだから」

と言われて、確かに柊一とは面識はあったものの、同じ組になったことがないというのもあるけれど中学時代に会話した覚えはないことを思い出した。

教室の隅の方で、青白い顔をした、あまり他人と多くを喋ろうとしない閉鎖的で陰気な雰囲気少年たちが集まっているのが葵生にとっては苦手で、意識をしていたわけではないけれど、避けていたのかもしれない。時々舐めるように人や物を見詰める視線が気味悪く、組を跨いでその小さな集団は妙な連帯感で結ばれていて、どこにいても監視されているようで、その仲間の一人である柊一が塾にいたのに気付いたときには、これからのことを思い遣って軽い頭痛を感じたものだった。

塾内でもそれほど親しくなることはなく、適度な距離を置いているつもりなのだが、柊一はこの機会に近づけたらと思っているのか、何かの用にかこつけて葵生に頻繁に話し掛けるようになった。塾の話をしているときは、二人だけの秘密を共有しているような気分が

して、柊一は他の同級生たちの知らない葵生を見ているのだと、優越感に浸ることが出来た。一方の葵生はというと、柊一とはあくまでも塾の話をしているだけで、特に秘密めいた謎の話をしているつもりは全くないので、必要だから喋っているのだ、というつもりである。

二人の間にこのように思いの隔たりがあることを知らない柊一は、なんとも哀れな気もするけれど、葵生の思いの方が世間では多くの人たちに理解してもらえるのであろう。そういう点からすれば、柊一にとっては二重の意味で哀れである。

電車に乗っている間、葵生からすれば仕方なくといったところだが、それを押し殺して、柊一とあれこれと話をしていたのが、それほど益になるような話もなく、何度欠伸を殺したことだろうか。こうしていることにしても、どうせなら椿希と話している方がよほど心安らかになるし、楽しいのに、早く目的の駅に着いてくれないかと上の空である。よって、二人で話した内容もそれほど覚えておらず、ここでもまた柊一がなんとも可哀相なことだ。

駅に着く少し前になって、それまでほとんど柊一が話していたのが一度途切れたので、葵生は思い出したように口を開いた。

「あまり俺のことを塾の皆に言って回るのは、止してもらえないか。皆の中で俺の間違った像が出来上がっていくのを見てみると、俺はそんな大した人間でもないのになって辛くなるんだ。俺のありのままの姿は分かる人には分かるかもしれないけれど、それにしても聞いていて恥ずかしいから」

葵生がそう感じるのも当然のことである。だが柊一にしてみれば、葵生の名声を高めようと思つてのことなのに、そういう風に言われるのは心外だと思つて、

「どうして。僕は葵生は皆から注目されるに値すると思つているんだけどな。もっと目立つていいと思うし、もっと自信を持つべきなんだ」

と訴える。葵生は謙虚な気持ちから言っているのではなく、心底そ

ういう風に上へ上へと持ち上げられるのが厄介で迷惑だと感じているので、柊一の言葉にもただ鬱陶しいものとしか思えない。

「俺のことを評価してくれるのは嬉しいけど、俺の言動を事細かに、それから脚色を加えて大袈裟に皆に伝えるのは困るんだ。もっとはつきり言ってしまうえば、それだけ俺のことを観察されているのだと思うと、気味が悪い」

婉曲に言うより、しっかりと思っていることを伝えようと思った葵生は、自然と言葉の調子にも強さが込もっていた。葵生の思いの強さを感じられた柊一は、ばつの悪い思いをしたものの、「でも」「だけど」と口籠っていて諦めようとしなない。

「そういうことだから」

と、冷たく突き放すように言ってしまうと、葵生は一切の言い訳を受け付けまいと遠くの景色を見詰めている。柊一は厳しく言われてもなお、あまりにも整っている葵生の横顔を見ながら、葵生は惜しいことをしている、と思ってそつと溜め息を吐いたのだった。

都会の街並みがどんどん遠ざかり、光が遠のいて家々の弱い明かりが見えるようになると、光塾の最寄り駅に着いた。この辺りは住宅街が広がっていることもあって、どこかにふらつと寄り道の出来るようなところはなく、皆足早に家路に着こうとしている。街からそう遠く離れていないのに、明かりの数も強さもぐつと減り、落ち着いた雰囲気と共にどこか寂しさも感じられて、心細い心地もする。車のよく通る大通りを少し歩いていても、喧騒の音は極端に違っていて静かだから、色々と考えるにはうってつけである。葵生も柊一も、それぞれの思いを巡らせながら光塾への道程をゆっくりと歩いていたのだった。

第一章 第二話【光】4

高校生活にもようやく慣れて軌道に乗ってきた初夏の頃になると、気の合う友人同士が固まって休み時間を過ごすことが多くなっていた。そろそろ衣替えの時期になり制服も重たい冬服から中間服や夏服へと変わりつつあり、木々も若葉が萌えいずるように、心までが瑞々しく爽やかになるようであった。

容姿でも成績でも優れている夏莉葵生は本人は素知らぬ振りをしているけれど、どこへ居ても目立っていて、休み時間になると彼がいる方向へ視線が自然と向けられてしまうのは、女子の塾生たちならば仕方のないことであつた。自分たちから話しかけたいけれど、同級生でありながら近づくのも恐れ多いような雰囲気で、視線が偶然合つた時にかこつけて話が出来ればと狙っているばかりだったのである。

葵生が椿希とばかり話をしているのは、もはやほど鈍くない限りは誰もが気付いていたことであつた。男子校出身ということもあつてか、そもそも女子学生と話をしていること自体がなくて男子学生と話しているのだが、女子の中では椿希と妥子ばかりで、特に椿希に対してだけは笑顔を見せる数も多ければ、自ら話し掛けようとしている風が見て取れるので、おそらく特別な感情を持っているのだろうと察することが出来たのだつた。美男美女と言うにはまだ幼すぎるけれど、とても似合いの二人なので男子学生の多くは苦笑いしながら見守り、女子学生の一部は心の中で応援し、またある一部は嫉妬心を煽られて妬ましがね視線を椿希に送り続けていた。

「なんだかつまんない。葵生くんたら、つーちゃんと一緒にいると楽しそうにしているくせに、あたしが話しかけるとなんとなく鬱陶しそうにするんだもん」

頬を膨らませながら茉莉が言ったのも、無理のないことであつた。後ろから話し掛けると椿希だとも思つたのだろつか、少し表情を

緩ませて振り返るのだが、彼女ではないことを知ると途端に表情を真面目くさったような顔に変えて、「何か」と言っのがなんとまあ無愛想なことか。

「そりゃあ、お前は喧しいからなあ。その甲高い声も大きな声も聞き苦しいし。もうちょつと淑やかさがあってもいいんじゃないのか、椿希みたいに」

と、桂佑までが椿希を褒めて茉莉の言うことが間違っているかのよう

に言うので、茉莉はますます機嫌を悪くさせた。

「あんたみたいに冷めた物の見方しか出来ないような男には、あたしの気持ちは分かりっこないでしょうよ」

すっかり怒りに任せて言い放ってしまったので、茉莉はぷいと桂佑から視線を逸らせてしまった。茉莉も茉莉で、突然怒り出したかと思えば、突然大きな口を開けて笑い出したりと感情の起伏の激しい性質なので、とても付き合いきれないと桂佑は思っていたのだった。振り回される周囲の立場になってみれば、桂佑がつれない態度を取ってしまうのも仕方のないことであった。

「そうそう。山城くんって、恋愛には程遠いように見えるもんね」

同調するのは、茉莉と同じ学校に通っている甲斐ゆり子だった。

椿希と妥子の関係が爽やかな友情関係を築けているように見えるのに、何故この二人の関係は主従関係とまでは行かないにせよ、力の差が歴然としているように見えるのだろうか。

恋愛には程遠いと言われても、そんな風には微塵も思っていない桂佑はそつと溜め息を吐いた。当時としては早熟な方だった桂佑は、これでも中学時代には彼女と呼べる存在の人がいて、それなりに女子学生からの評判は良かったのだけれど、今は葵生に気圧されてしまつてすっかりその様子もなりを潜めてしまっている。葵生さえいなければ、すらりとした長身になかなか整った顔立ちで頭の回転の速い桂佑は、さぞかし人気があつたことであろう。

桂佑はそんな言い訳をすると、何倍かにして返答するだろうと思われたので、敢えてだんまりをすることに決め込んだ。

「ほら、あそこ。葵生くん、つーちゃんといると本当に楽しそうによく笑ってる。あたしたちには全然そんな風に笑わなくて、いつもクールにしているんだけど、ああいう顔もするんだって思うと悔しくてね」

と、茉莉は遠い目をしながら葵生と椿希が会話しているのを眺めていた。

「その周囲に何人かいるだろう」

呆れたように桂佑が言っていると、

「そうかな。あたしには二人の世界が出来上がっているように見えるけど。まあ、つーちゃんはそのつもりはなさそうだけど、葵生くんはかなり本気だね」

と、さも全てを知り得たかのように生意気っぽく言った。どうやらこの二人以外はその他大勢に見えるらしく、会話には妥子や笙馬、桔梗もいたのだけれど一切無視してしまっていた。どうやら嫉妬心は立派だが、相手をこちらに振り向かせようという努力をするつもりはなく、一部の意地の悪い女子学生に比べれば良い方ではあるにせよ、なんと呆れたことかと桂佑は心底見下してしまっている。

茉莉の自宅から見ても、茉莉の通う高校と葵生の通う高校とは同じ方向にあるけれど、距離があって、葵生の高校の方が遠くにある。茉莉の通う大学附属高校は各駅停車駅で、葵生は快速電車で飛ばしていくので、結局時間にすれば同じくらいで着いてしまう。学校の最寄駅も違えばそれぞれの自宅の最寄り駅も異なるため、偶然を装って出会うというのも無理がありすぎるため、一考したことはあるけれど実践したことはなかった。

葵生の通う、染井の濃紺の詰襟の学生服を着た学生を見掛けると、この人は葵生のことを知っているのだろうか、親しいのだろうかと同様に思いを巡らせたものだった。葵生はこの学生服がとてもよく似合っているので、春に染井の学校の前で桜咲き乱れる中でその姿を見ると、その濃紺の学生服がより一層映えて、整った葵生の顔立

ちをはつきりと映し出すだろうと思うと想像であつてもうつとりと頬を染めてしまいそうである。

男子校だから、中学卒業の時に第二ボタンの争奪戦はなかっただろうが、もし自分が近隣の学校に通っていたら、思い切つて手を挙げていたかもしれないと、茉莉は思っていた。

葵生はよく直接学校から塾に寄ることが多かったが、たまに時間に余裕があると一旦家に戻つて私服に着替えてくることがあった。比較的身軽な格好を好むのか、高校生だからそれほど洒落にかけると金銭的余裕もないのか定かではないが、黒や灰色などの色合いのものにジーンズを合わせることが多かった。とても簡単な装いなのだが、葵生が着ると、とても洒落た優美なもののように思えるから不思議だった。

そうしていつの間にかどんどん葵生に惹かれているのに、もう一歩進めずにいるのは、先ほどの遣り取りの間に出てきた、冬麻椿希の存在があつたからだつた。

いくら葵生が椿希に惹かれているといつても、もし椿希が女子高生らしいあどけなさや可愛らしさ、すぐに流行りものに飛びつこうとするような軽さを持っているのであれば、葵生を引き剥がそうとしても椿希に立ち向かつていたと思う。

だが、椿希の通う女学院の学生たちが彼女のことを『プリンス』と呼び慕うのも理解できるほど、日を追うごとに彼女の魅力を感じるようになり、次第に虜になつてしまいそうなくらいであつた。初めの頃はあんなに椿希に対して、葵生の心を独り占めして弄ぶ嫌な女と思つて嫌っていたくせに、貧血でふらふらとぼんやりした意識の状態で授業を受けているのに気付いてくれたのが椿希だったことから、途端に彼女に対する考えを改めたのだから、不思議なことである。

元々茉莉は貧血症で、よくふらついてぼうつとすることが多かったのだけれど、皆もそれを承知していたから放っていたし、自分でもこのようなものなんだと思ひ込んでいた。だが、椿希が気付くや

いなやすぐに講師に訴え、空き教室に茉莉を背負って連れて行つたのだった。女手で力の要ることをするのはしのびないと、真っ先に桔梗が交代すると言ったが、

「妙齡の女の子の体を、むやみに触らせるわけにはいきません。私なら大丈夫だから、気にしないで」

ときつぱりと断り、茉莉に声を掛けながら運んだのだった。このようにとつさの判断と行動力を見せた椿希のときぱきとした鮮やかな対応には好感を抱いた者も少なくなかっただろう。高校生だからこそ余計に目を見張るものがあつたのだが、たとえ大人であってもこのようにすぐに対応出来る者は意外と少ないのではないだろうか。

葵生がこのことを目撃してから、さらに椿希への思いを強くしてますます他の女子など眼中に入らないようになってしまったけれど、あの一件で椿希が見かけだけではなく本当に『プリンス』と呼ばれるに相応しいだけの器量を持っているのだと思い知らされたため、妬ましく思う者も表立ってそれを口にすることはなくなったのだった。

そして茉莉もまた、椿希のことを憎らしく思っていたのがだんだんと彼女に引き込まれて、彼女と話すことが出来れば嬉しいし、気に掛けてくれると恋に堕ちたかのように、ときどき心がざわめき緊張のあまりに声が上ずってしまうのだった。

だから、最近は葵生と椿希の二人が親しげに笑い合っているのも、葵生がそつと椿希に何か耳打ちしてくすくす笑っているのを見ても決して嫌だとは思わないのだけれど、何故か気に入らなくて苛々としている。その苛々の正体が掴めないことも腹立たしく、落ち着かない心地で悶々と過ごすばかりであった。

そんな茉莉の様子を見るに見かねて、桂佑が、

「俺には茉莉が何を苛つているのか分からないけれど、せめて自分の感情ぐらい自分で操作できるようになることだな。たまには葵生みたいに、何があっても動じない振りでもしてみたらどうか」と、呆れたようにわざと感情を抑えた声で言ったので、茉莉はまた

腹を立てて舌を噛んで睨み付けてやったが、桂佑の言うことももつともだと思うと反論することが出来なかった。

光塾に来てからというものの、ずっと悔しい思いばかりしていて何一つすっきりとした心地にさせられるものに会っていないのは、自分の不甲斐なさのせいだと自覚しているだけに堪らなく辛いのだ。光塾を辞めてしまえばこんな物思いをしなくても済むのだろうけど、両親の言いつけで内部進学をなんとしても果たすために入った塾であるし、やはり葵生や椿希といった人物は、茉莉がそれまで過ごしてきた生活の範囲の中では到底出会うことのなかった洗練された人たちのようで、格の違いはあれどその空気をもつと感じていたいと思うので、とてもあつさり辞めてしまふ気にはなれなかったのだ。

「茉莉みたいに足掻いている子を、可愛いと思う男子はたくさんいると思うよ」

ちらつと悩みを桔梗に言ったところ、そんなことを言っただけで慰めてくれたけれど、そんなことで解決するようなものではない、もっと根深いのだと茉莉は分かっていた。

「そう言ってくれるんなら、私のこと好きになつてよ」

思わず口を突いて出てしまった言葉に後悔しながらも、少しばかりの良い返事を期待してしまうのは、それによっていくらか気持ちが救われるかもしれないと思ったからなのかもしれない。少しの間を開けてから、

「そうはいかないよ。茉莉だつて嫌だろう。嘘でもいいから好きと言っただけいいわけならまた別だけど、そんな風には思っただけよ」

と、微笑みながら優しく言うので、茉莉は余計に辛くなってひくひくと体が痙攣を起こしてしまっている。涙が零れそうになるのだけはどうにか堪え、

「当然だよ」

と、精一杯の笑顔に向けた。

桔梗もまた、椿希に惹かれている男子の一人なのだということは分かってはいたけれど、まだ出会って数ヶ月ほどしか経っていないが、桔梗となら話が通じ合えるような気がしていただけに、優しさを含みながらもきつぱりと断られてしまうと辛いものがある。

ただ客観的に見ても、葵生と椿希と桔梗の三者はいがみ合うような関係ではなく、互いに学業面でも意識しながら高め合えるような関係を築けているので、それが羨ましく思えた。もしかしたら互いに牽制し合うようなものがあるのかもしれないけれど、その三者の中に入っていくことが出来るというのがどれほど茉莉にとって高い壁であるか、きつと桔梗には想像も出来ないだろうと思うと、同じ高校生でありながら雲の上の人たちを見ているようで、居た堪れない気持ちになってしまう。

そんなことを考えているうちに、ぼんやりと潜んでいた不快感はいつの間にか消えかかっている、ひとつの答えを茉莉は見出そうとしていた。本当にそれで解決するのか否かはまだ分からないけれど、一時的にでも心が安らかになるのであれば、そう思い込めばいいと思ったのだった。

第一章 第三話【夕暮】 1

その年の夏は、例年にも増して、何もせずじつとしていても汗の滲む蒸し暑さで、すぐに衣服は湿り、冷房の部屋に行くと冷氣によつてその濡れた服がひんやりと冷たく、外と内の温度差に体がついていけず、体調を崩す者も多くいたものだった。冷房病といってあまりにも長時間冷房の効いた部屋にいたがために、真冬でもないのに冷え性の女子塾生がぶるぶると震えだし、分厚い上着を何枚も羽織つて授業を受けていた光景が、葵生には物珍しく思えたのだった。

女性は一総じてこういった冷えに弱いのだと聞いていたし、そういえば家族を見てもそうだったと思うと、こういう時でも真つ先に気掛かりなのは椿希がどうなのかということで、彼女の様子をちらと見ると、椿希もまた何枚も重ね着をしているわけではなかったが、やはり上着を羽織つて授業を受けていたので、やはり彼女も寒いのだろうか、人知れず案じずにはいられない。

結局椿希は葵生が心配したとおり、夏の終わり頃に風邪を引いて特に鼻の通りが悪くなったのと喉が乾燥していがいがしているらしく、何度くしゃみを繰り返していたのだった。

「この分だと歌も歌えない」

と、悔しそうにしているのが可哀相で、早く治らないかと葵生は祈りながら見守るしかない。夏風邪は長引くというように、一旦良くなったように見えてもまたすぐに元通りになってしまうことを繰り返していたので、すっきりとしないまま、椿希は喉だけはなんとかしても治さねばと、生姜湯を飲んだりのだ飴を舐めたりと、彼女なりに努力はしているようだった。

そんなことをしている椿希に代わって自分に伝染^{うつ}てくれればいいのに、と思うほど、葵生はもうすっかり椿希への思いを強くさせてしまっていて、寝ても覚めても片時も彼女のことを忘れようとも

しない。それどころか、夏期講習が終わって通常授業でも週に二度は会うことが出来るというのに、「明後日まで会えないなんて」だの「今日はあまり話が出来なかった」などと、思い詰め過ぎて心が塞がったようにも思える心地で日々を過ごしているのである。

そうやって思いを溜め込んでいるうちに、知らず季節は秋へと移り変わり、あの猛暑も一体どこへ行ったのやら、気付けば衣服も長袖になっていて過ごしやすい気候になり、うららかな空の下に、色づく少し前の銀杏の木がずっと立っているのが風情ありげに見える。人の格好も、軽すぎず重々しくもなく、春の浮かれたような気分にさせられる柄ではなく、落ち着いた色合いのものでござっぱりとしているのが、品良く見えて感じの良いように見受けられる。

葵生は制服を早くも学生服に切り替えていた。学校にいるときはちゃんと着ているか、脱いでいるかのどちらかなのだが、塾に制服のまま行くときには学生服を少し着崩して、ボタンを全て外して中に着ている物をわざとさりげなく見せるようにしたり、上だけいくつか外して少しだけ中が見えるようにしたりと、学生服で洒落たことをするのだから、女子塾生たちからはまたも葵生を見詰める視線が熱くなってしまうのだった。

それがわざとなのかそうでないのか、周りからは分からない。ただほとんどが塾に来てから葵生がそのように着崩していることを思えば、まあ彼女に見てもらいたいのだろうということが察せられるが、ボタンを外すのがどういった時かというところまで目ざとくしている者もいなかったのだけれど。

そんな風になんとか彼女の気を惹こうとしている葵生だが、これ以上踏み込んだ関係になるよりは、いつそのことこのままの関係を続けていこうかという思いが出てきたので、自ら積極的に彼女に恋心を抱いていることを悟ってもらおうと努力はしないでした。面倒だからというのではなく、この関係が気楽で丁度良い距離感で心地良いからだった。それに、何より椿希が女子校に通っているという

ことで、やきもきさせる相手が現れる様子はないし、そう容易く彼女が男の誘いに靡くような浅はかな人間ではないということも、心を尽くして語り合ううちに分かっていたので、葵生はすっかり安心してしまっていたのである。

葵生が光塾で得た初めての感情は、間違いなく恋というものだ。葵生自身も気付いているけれど、さてその扱いようはどうすればいいのかと悩んでいるうちに、どうやら高校の友人に恋人が出来たらしく、その話で持ちきりになったことがあったのだ。

その子の容貌や学校、性格、どうやって口説き落とすのかなど、この年頃の男子が興味を持って当然のことを誰彼ともなく質問攻めにしていく。それはまるで尋問のようで、顔を真っ赤にさせて思わず耳を塞ぎたくなるような、大変際どい質問も中にはあったのだ。か言いつけれど、その彼も上手く曖昧にさせながらも、未だほとんどが味わったことのない甘い思いを吐き出して、周りの友人たちを羨ましがらせていたのだ。

葵生も面白がって二、三ほどからかうように何か言ったようだけど、さて普段は生真面目に振舞っている人が一体どんなことを聞いたのだろうか。ただ自身も初めて彼と同じように、身を焦がすような思いを経験しているだけに、きつととても的を射た鋭いことを訊ねたのであろう。

葵生は訊ねているうちに、今までの人間関係がいかに淡泊なものだったかと気付いて、少し反省しなければならないと、密かに思っていた。

「そういえば、夏苺も塾に通っていなかったっけ」

誰かがそう言うと、そういえばそうだったと他の者までが思い出して言い出した。

「夏苺なら楽勝でしょう、彼女作るのくらい。いや、女に対しては口下手で無愛想だから無理かもなあ。そういえば三組の奴が『彼女いないんなら立候補しようかな』とか言ってたはずだけど、冗談なのか本気なのか分からないよなあ」

と雄弁に話すのを聞いて、葵生はうんざりするような抗議したいような気持ちに一寸なったのだが、女という言葉聞いて椿希のことを思い出すと、心も鎮まるようであった。冷静に葵生は周りがあれやこれやと囁し立てるのを、楽しむことにして、腕と足を組んで椅子の背もたれにもたれかかり、悠然としていた。

「ほら、そうやって座って足を組んでいるだけでも、十分に絵になるじゃないか。夏苺から言わなくても、女の方から言い寄ってくるだろうよ」

と、にんまりと笑いながら、さも色めいたことの経験がある様子で、別の友人が言った。それなら椿希がそうしてくれるのなら、どんなにか嬉しいことだろうと、葵生は何やら色々と思い浮かべてはここにこと微笑んでいる。

「追っかけの女子高生たちの中に、ほら、髪を一つに括った可愛いらしい子がいただろう。俺なんてあの子みたいな子が追いかけてくれたら、喜んで返事して、すぐに付き合っちゃうだろうなあ」

このように夢見がちに言う者もいたり、皆それぞれに思うことが、自分の環境の応じて違うのであった。それにしても、先ほどまでのあの恋人の出来たという話がすっかり飛んでしまつて、なんとなく哀れに思えるが、それよりもまさしく美少年と言うに相応しい葵生の恋の話となると、前の話を差し置いてでも盛り上げたくるのであった。

放つて傍観していると異様な盛り上がりを見せ始めたので、流石に葵生も抑えなければと思つて、

「おいおい、ファンに手を出すなんて最低だぞ。そんなことをするまでもないと、皆が信じてくれてるようだから、俺もそうでありたいと思うね」

と言うと、「流石スターは違うね」と、ますます冷やかされてしまった。

「そんなことより、実際のところどうなんだよ。お前に彼女がないとなると、俺たちの高校生活での恋愛事は絶望的なんだが」

真剣な顔でそう言うので、葵生も少々面食らったようになり、

「そんなに深刻になられても困るけど」

と、言葉を詰まらせたが、すぐさま恋というものの甘い蜜の味を、少しばかり知っているので、葵生は優越感が滲み出てきて、どうにか友人たちを煙に巻いてやろう、という悪戯な心が芽生え始めたのだった。

「そうだなあ、艶かしくない関係もなかなかいいもんだよ」

初心な男子校育ちの友人たちは、互いに視線を合わせて、これはどういふ意味なのか、推し量ろうとするけれど、これといった答えが思い浮かびそうになく、こればかりはいかに学力が優秀であつてもどうにもならないことであつた。ただ一つ言えるのは、どうやら葵生には親しい女子の友人が出来たらしいということぐらいであるうか。それぞれ思ったことはあつたけれど、口々に言い合えず互いに顔を見合せるばかりであつた。

さてこんな遣り取りをすっかり聞いてしまった柊一は、どうしてもそのことを葵生に突っ込んで訊ねずにはいられなくなり、そつと待ち伏せをして一緒に塾へ行くよう図つたのだつた。こここのころ葵生がどうも避けているのか、時間を後にずらしているように見えるので、連れ立って塾に行くことはない。二人きりで話をしようと思えば、塾内では到底出来そうにないので、この時くらいしか機会がないだろうと思つたのである。

葵生が校門から出た後ですぐに、偶然を装つて柊一は姿を現した。すっかり柊一が先に出了たものとはばかり思っていた葵生は、心外な顔をした。待ち伏せされるのも重苦しくて、自分の行動をまるでよく見られていたようで、良い心地がするものではない。偶然のようにしているけれど、そうではないことくらい、とうに見抜いていた葵生は、柊一があれこれ話すことに素っ気無い生返事ばかりをしていたが、休み時間の恋人がどうこうといった話に及んだ時になって、眉間に皺を寄せて不快感をあらわにしたのだつた。

「あの時、僕も友達のところ遊びに来てたから偶然聞いてしまったんだけど、嫌な奴になったものだね。皆、葵生に彼女が出来ていたらいいなと思ってるのに、わざと言ったでしょう」

と、あの台詞まで聞かれていたのかと思うと、呆れ果てて言葉を交わすのも億劫になってしまいそうであった。

「随分と余裕ぶっているように見えたけど、もしかして彼女はもう自分のものだと思って、安心してゐるのかな。だったら、それは間違いだと言いたいね」

先ほどからぺらぺらと語り続ける柊一だが、葵生は憮然とした表情で聞いているのか聞いていないのか、さつさと足早に駅に向かっていた。手早く定期券を用意して改札を通るが、その間もつらつらと演説するのが、口さがない女子高生が傍にいて、いい加減に静かにして欲しいと思うのだった。時間も時間だったので、ちょうど少し退社時間の早い会社員や他校の学生らの下校時間と重なり、改札を通してホームへ行くまでも二人きりでいたというわけではないのに、見知らぬ他人にこんな身内話を聞かれることは、葵生にとつてはとても耐えられそうになく、

「ちよつと声が大きいだらう。周りにたくさん人がいるのに、聞かれたくないことも聞かれてしまうのはすごく嫌なんだけど」と抗議したが、声を潜めるようにしただけで、話は一向に止みそうになかった。

「僕は、彼女には葵生のような奥手の人間ではなく、桔梗のように明るく社交的で、皆を引っ張る纏め役のような人がいいと」

と言いさして、はつと隣に気付くと葵生が鋭い目でこちらを睨み付けているのであった。その眼力の強さに、ぴたりと柊一は口を動かすのを止める。びくつと体が震えて、何か言い訳しようとしたが、それすらも許さないと言わんばかりの表情であった。

「日向、黙れ」

声も低く響くもので、葵生が静かに怒りを込めているのは明らかであった。柊一はもはやそれ以上語ること出来ず、気まずく口を

噤んだまま、葵生の機嫌を損ねさせてしまったことに、すっかり動揺していた。こういった他人を不快にさせるようなお喋りが、一番葵生の嫌うことであることを、柊一はまだ知らなかったのであった。葵生は塾へ行くまでの電車の中、時間をずらすにしても後ろにずらすと、待ち伏せをされてしまうかもしれないと考え、これから柊一よりも早く出るなり、出たふりをするなりしようか、と色々と考えていた。もちろん、その日は柊一とは一言も会話をすることはなかった。こんな詰らないことで悩ませている場合ではないのに、と心の中で嘆息を吐いて憂鬱な気分になってしまい、堪らなく彼女のことが恋しくなったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6540c/>

星屑の詩

2010年11月1日09時55分発行